

# 滝原Ⅳ遺跡

—熊川線No.33～No.49鉄塔化工事に伴う発掘調査報告書—

2014

東京電力株式会社 群馬支店  
群馬県吾妻郡長野原町教育委員会



たき ぼら よん い せき  
滝 原 IV 遺 跡

—熊川線No. 33～No. 49 鉄塔化工事に伴う発掘調査報告書—

2014

東京電力株式会社 群馬支店  
群馬県吾妻郡長野原町教育委員会



# 例 言

1. 本書は、群馬県吾妻郡長野原町大字応桑字滝原に所在する滝原IV遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は熊川線（No.33～No.49）鉄塔化工事に伴う事前調査として、原因者である東京電力株式会社群馬支店の委託を受けた長野原町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査から調査報告書作成に至るまでの調査事業費は原因者負担による。
4. 調査は発掘調査を平成25年8月27日から8月31日迄、整理調査及び報告書作成を平成25年9月1日から平成26年2月28日迄、同年10月1日から12月13日迄の期間実施した。
5. 本遺跡の出土遺物ならびに図面・写真は全て長野原町教育委員会が保管している。
6. 本書は富田孝彦が編集・執筆した。各作業分担は以下の通りである。  
編集・執筆：富田 遺構・遺物写真撮影：富田 土器および礫石器実測・トレース：柿本  
剥片石器実測：(株)歴史の杜 剥片石器トレース：向出 図版および写真図版作成：富田・向出
7. 本書中の遺跡名は調査が数次にわたっている場合はそれぞれを識別するために遺跡名の最後にローマ数字を表記してある。同一遺跡内の別地点と解釈していただきたい。  
例) 坪井遺跡 VIII (遺跡名) (第8次)
8. 調査において以下の項目の一部を委託した。  
表土掘削・埋め戻し：東光建設株式会社  
測 量：(株)測 研  
剥片石器実測：(株)歴史の杜
9. 本書における縄文土器に関しては山口逸弘氏（公益財団群馬県埋蔵文化財調査事業団）に御教示いただいた。
10. 発掘調査、整理調査及び報告書作成にあたり、次の方々、団体から御指導・御協力を賜った。（五十音順 敬称略）  
相京建史・麻生敏隆・飯島静男・飯田陽一・飯森康広・石田 真・井上慎也・小野和之・小川卓也・  
神谷佳明・黒澤照弘・坂口 一・篠原正洋・鈴木徳雄・関 俊明・高橋政充・高林真人・堤 隆・  
中沢 悟・福田貫之・藤巻幸男・洞口正史・松本太郎・水田 稔・向出博之・諸田康成・山口逸弘・  
吉田智哉・(株)測研・(株)歴史の杜・群馬県教育委員会・公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
11. 調査組織は次の通りである。  
教 育 長 黒岩文夫（～平成26年4月29日）  
教 育 課 長 市村 敏（平成26年4月30日～平成26年5月31日 教育長職務代行者兼務）  
矢野今朝治（平成26年6月1日～ 教育長職務代行者兼務）  
教育課補佐 白石光男（平成26年3月31日まで社会教育GL）  
文化財係長 富田孝彦（平成26年3月31日まで社会教育副GL）  
調査参加者 柿本六美・坂井春栄・佐藤久美子・向出治恵

# 凡 例

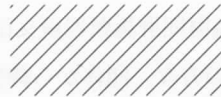
1. 本書で使用した地図は1:2500「長野原都市計画図」(長野原町1994)、1:25000「長野原・大前」(国土地理院1997)である。
2. 挿図の方位は磁北を示す。
3. 挿図の縮尺については下記の通りであり、各挿図中に示してある。

遺 構：住居跡・・・1/60	土 坑・・・1/30
遺 物：復元土器・・・1/4	土器片・礫石器・・・1/3
剥片石器・・・1/1	
4. 遺構の略号については以下の通りである。SI：竪穴式住居跡 SK：土坑
5. 挿図に図示した遺物は、観察表にその内容を記してある。観察表における復元土器の法量は左側から器高、中央が口径、右側が底径を表し、計測数値は推定値を含む。( )内の数値は現存値、< >内の数値は復元値を表す。
6. 土器の色調に関しては、「新版標準土色帖1995年後期版」(編・著小山正忠・竹原秀雄、監修農林 水産省農林水産技術会議事務局、色票監修財団法人日本色彩研究所)の色名を参考にした。観察表において外面/内面の順で記した。
7. 挿図中のスクリントーン・記号は以下の通りである。

## 遺 構・土層図



焼土



地山

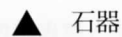
## 遺 物



磨面



土器



石器

# 目次

例言

凡例

第1章 調査概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	3
第1節 遺跡の位置	3
第2節 周辺の遺跡	3
第3節 基本土層	11
第3章 検出された遺構と遺物	17
第1節 竪穴式住居跡	17
第2節 土坑	21
第3節 遺構外出土遺物	23
第4章 調査の成果と課題	24

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

## 挿 図 目 次

第 1 図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000) ……………	4	第 7 図 SI01 遺物出土状況図 (1/60)……………	19
第 2 図 調査地点位置図 (1/5,000) ……………	10	第 8 図 SI01 出土遺物実測図 1 ……………	20
第 3 図 基本土層 (1/20) ……………	11	第 9 図 SI01 出土遺物実測図 2 ……………	21
第 4 図 調査区全体図 (1/120) ……………	16	第 10 図 SK01 実測図 (1/30) ……………	22
第 5 図 SI01 実測図 (1/60)……………	18	第 11 図 SK02 実測図 (1/30) ……………	22
第 6 図 SI01 炉跡実測図 (1/30)……………	18	第 12 図 遺構外出土遺物実測図……………	23

## 挿 表 目 次

第 1 表 周辺の遺跡……………	5	第 3 表 滝原IV遺跡出土遺物観察表……………	26
第 2 表 SI01 柱穴計測表 ……………	17		

## 図 版 目 次

P L 1	1. 調査区近景 (南東から)	P L 4	1. SK02 (北西から)
	2. 調査区近景 (南から)		2. 作業風景 (南東から)
P L 2	1. SI01 (南東から)	P L 5	SI01 出土遺物
	2. 土層堆積状況 (南東から)	P L 6	遺構外出土遺物・航空写真
	3. 炉跡 (南東から)		
	4. 炉跡半截状況 (南東から)		
	5. 炉跡検出状況 (南東から)		
P L 3	1. 遺物出土状況① (南から)		
	2. 遺物出土状況② (南東から)		
	3. 遺物出土状況③ (南東から)		
	4. 遺物出土状況④ (東から)		
	5. SK01 (南東から)		



# 第1章 調査概要

## 第1節 調査に至る経緯

平成25年2月上旬に東京電力株式会社群馬支店より、熊川線鉄塔化工事の計画が策定され、埋蔵文化財の取り扱いについて、長野原町教育委員会教育課社会教育グループに照会があった。照会地は周知の包蔵地「滝原IV遺跡(No.153)」の範囲内に含まれていることから確認調査の必要がある旨を説明し、調査実施で合意を得た。文化財保護法第93条第1項の規定により、同年6月6日付けで関係書類(「発掘届」・「開発に伴う文化財調査願書」)が提出された。同年8月6・7日に教育委員会文化財担当の立会いのもと、対象地内に2本の試掘坑(トレンチ)を設定し、遺構の有無および土層の堆積状況の事前調査を行った。その結果、表土下40~60cmで縄文時代中期初頭の土抗1基が存在することが判明したので、施工前に発掘調査(記録保存)する必要があると判断し、その旨を開発事業主に伝えた。協議の結果、工事計画の変更が困難であるため、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。同年8月9日付け長教社第47号で長野原町教育委員会を経由して東京電力株式会社群馬支店長より群馬県教育委員会教育長へ「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。

## 第2節 調査の方法と経過

### (1) 発掘調査

#### a. 表土除去

表土除去は重機(バックホー)を使用して行った。確認調査で表土から40~60cmの深さで遺物が出土することが判明していたので、そのことを念頭に表土から遺構確認面まで少しずつ掘り下げていった。遺物の出土が確認されるまでを重機でそれ以下は人力で除去した。重機のバケットの爪に鉄板を装着して遺構を傷つけないように配慮した。

#### b. 遺構確認

遺構確認は上述の表土除去後に人力で行った。周辺は抜根跡が多かったが、掘り込みがないかジョレンで削りながら慎重に平面形を確定していった。

#### c. 遺構発掘及び遺物の取り上げ

遺構の発掘作業は、遺構の平面形を確定した上で土層観察用のベルトを設定し、遺構内の覆土の除去に着手した。住居跡・陥し穴の場合は長軸方向とその中心から長軸に対して直角方向に十字にベルトを設定し、土坑の場合は長軸に沿って半截して土層の観察を行った。

遺物の取り上げに関しては、単独と思われる破片は上層・下層・床面直上ごとに、個体もしくは遺物の集中している箇所は出土位置図(ドット図)を作成の上、取り上げ作業を行った。遺物出土位置図は1/20のスケールで作成し、標高値の記録を一点ずつ行った。

#### d. 実測図の作成及び遺構の写真撮影

実測図は土層堆積状況図、遺物出土位置図及び完掘状況遺構平面図を作成した。土層堆積状況図は遺構が遺物出土位置図と同様に1/20のスケールで作成した。完掘状況遺構平面図は光波測距儀を用いて行った。完掘遺構の変化点を三次元記録し、その場でパーソナル・コンピューターにより現地での詳細な観察の上で結線し作成した。また、土層堆積状況図及び遺物出土状況(位置)図のポイントの位置も完掘状況遺構平面図作成時に記録した。測定したデータは公共座標値に変換後、加工・編集を行いCD-R等に保管した。

遺構の記録写真は土層断面、遺物出土状況、完掘状況の順で行った。カメラは一眼レフを用い、モノクロとカラー滑りの2種類のフィルムを使用した。フィルムサイズはいずれも35mmである。またデジタルカメラも併用して撮影した。

## (2) 調査経過

### a. 発掘調査

発掘調査は平成25年8月27日から8月31日にわたって実施された。

8月27日、表土剥ぎ3分の2終了。遺構精査で縄文中期前葉土坑のほか、焼土・包含層・掘り込み数基検出。

8月28日、表土剥ぎ終了。縄文土坑半截、遺物上げ。その他掘り込み半截。

8月29日、縄文土坑が住居の北東コーナーにあたり、包含層が住居範囲、焼土が炉跡となることが判明する(SI01)。炉跡半截。掘り込みも2基の土坑以外は攪乱と判断。SK01・02断面図、写真撮影。

8月30日、柱穴精査と掘り下げ。炉跡半截状況写真・断面図作成。完掘・清掃・写真撮影。SK01・02断面図注記後に完掘。全体清掃・全景撮影。図面の補足。撤収。

8月31日、埋め戻し。

### b. 整理調査・報告書作成

整理調査および報告書作成は平成25年9月1日～平成26年2月28日にわたって実施された。発掘調査によって得られた遺物はテンバコで2箱、現場で作成した図面類は8枚であった。整理調査は担当の他に作業員3名という体制であった。作業は複数遺跡の整理と併行して行われた。

遺物洗浄・注記作業は同年9月2日で実施した。

遺物の接合作業は補填剤による復元も含めて同年9月5日～9月6日までに実施した。

遺物の実測・トレースは同年10月4日～12月5日までの調査や事業の合間に実施した。併せて写真撮影、遺物実測図版のデジタル編集を実施した。

遺構図版・写真図版のデジタル編集を同年12月6日～平成26年1月31日、併せて執筆作業は同年1月下旬～同年2月中旬にかけて行い、併せて保管用に資料・遺物の整理をして2月28日に平成25年度の作業を終了した。

なお、1月下旬に今回の調査箇所は工事契約段階で地権者と折り合いが付かず、鉄塔建設が白紙になったとのことで、協議の結果、平成25年度は印刷製本の手前までで終了し、新しい候補地の調査結果を待って次年度に報告書を刊行するという事になった。

平成26年度は10月1日～12月13日に編集の最終調整・校正、印刷製本を実施して全ての作業を完結した。

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡の位置

滝原IV遺跡が所在する長野原町は群馬県の北西部、吾妻郡の南西隅に位置し、「鶴舞う形の群馬県」と上毛かるたに詠まれている鶴の尾部下端にあたる。北部は高間山（標高1,341m）・本白根山（標高2,171m）の両山系から成り吾妻川流域沿いに東西に延びている。南部は浅間山（標高2,568m）の裾野に広がる浅間高原地帯を経て長野県に接している。滝原IV遺跡は南部の浅間高原地帯に属し、吾妻川の支流である熊川の左岸段丘上に立地する。

遺跡は吾妻流域地帯の最南端から浅間高原地帯への移行部に位置し、林道滝原線に沿って遺跡が分布することから古道として機能していたことが窺える。遺跡の東側には山頂から北西へ緩やかな稜線が伸びる菅峰（標高1,474m）が聳えている。この菅峰は別名「大洞山」といわれ、長野原町と東吾妻町との行政区の境界となっている。今からおよそ100万年前に活動していた古い火山で、もともと円錐形であったものが、長い年月の間、徐々にではあるが、絶え間なく山肌を刻んだ雨風よりその姿を変えてきているといわれている。

本遺跡の立地する段丘は熊川により開析された河岸段丘で、熊川からの比高差は約50mを測る（第1図）。この段丘は約21,000年前に噴出した応桑泥流堆積物を削って形成されている。この上の関東ローム層中には約11,000年前に噴出したと考えられる浅間一草津黄色軽石層（As-YPk）が厚く堆積している。調査地点の標高は855m位である。

### 第2節 周辺の遺跡

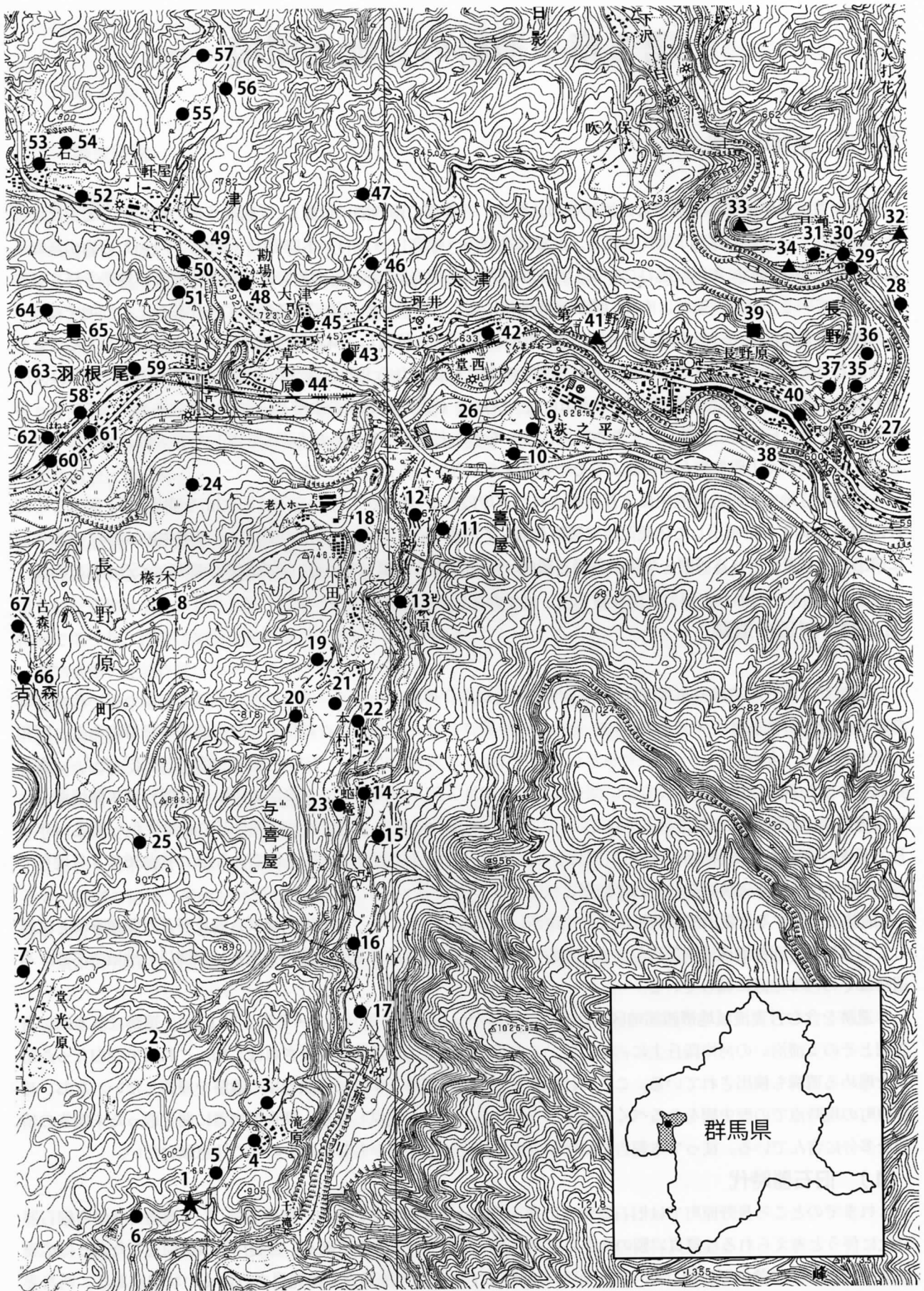
長野原町における遺跡分布状況は昭和48年に群馬県教育委員会刊行の『群馬県遺跡地図』に依っていたが詳細な遺跡の分布の把握は不十分であった。その後、町教育委員会は県教育委員会文化財保護課の指導のもと、昭和62年度から3ヶ年かけて、全町を対象とした遺跡詳細分布調査を実施し、199の遺跡包蔵地を確認した<sup>(1)</sup>。また平成6年度から八ツ場ダム建設事業に関連した工事用進入路や水没地域の工事に対応して（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が継続して調査を実施しており、新たな包蔵地の発見や遺跡名の変更などの必要性から平成14年3月と平成16年4月に遺跡地図の改訂を実施した。その後も小さな変更を繰り返しているが、平成26年4月現在で220の包蔵地（指定史跡等を含む）が把握されている<sup>(2)</sup>。

本遺跡の位置する吾妻川流域地帯は大きく東西に分けることができ、東部地区はダム湖及びダム関連事業と直結している地域、西部地区は東部寄りの大字長野原地区以外は基本的にはダム関連事業とは無関係の地域である。本遺跡はその西部地区に属している。

本遺跡を含む吾妻流域地帯西部地区には多くの遺跡が分布している（第1・2図・第1表）。遺跡は基本的に吾妻川とその支流沿いの河岸段丘上に占拠しているが近年丘陵上にも遺跡が発見されはじめ、これまで空白だった時期を埋める遺構も検出されている。ここでは調査を実施した遺跡を中心に当該地域の遺跡を概観したい。なお、長野原町の現時点での歴史観をなるべく記載する立場から、筆者が実見したり、調査担当者に聞き取った未報告の情報を多分に含んでいる。従って本報告時には多少異なる見解になるかもしれないのでご注意願いたい。

#### （1）旧石器時代

これまでのところ長野原町では旧石器時代に遡る遺跡は確認されていない。柳沢城跡<sup>(3)</sup>で遺構外ながら細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩製のスクレイパーが出土しているのみである。吾妻川流域は前述したように応桑泥流や浅間一草津黄色軽石層（As-YPk）が厚く堆積しており、発掘調査では発見されにくい状況がある。西吾妻地域はもとより吾妻郡内でも旧石器時代は高山村に所在する新田西沢遺跡<sup>(4)</sup>でしか確認されていないのが現状である。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1/25,000)

第1表 周辺の遺跡 (数字は第1図と対応)

No.	遺跡名	町No.	種別	時代	概要	備考
1	滝原IV遺跡	153	散布地	平安	本報告。	文献2,25
2	チガヤ遺跡	146	散布地	縄文・平安	磨石採集。	文献2
3	滝原I遺跡	150	散布地	平安		文献2
4	滝原II遺跡	151	散布地	平安		文献2
5	滝原III遺跡	152	集落跡	縄文・平安	黒曜石片・磁器採集。平成8年度調査(町)。縄文後期初頭敷石住居跡1軒・土坑2基を検出。	文献2,7
6	滝原V遺跡	154	散布地	平安		文献2
7	堂光原遺跡	184	散布地	縄文	黒曜石片採集。	文献2
8	榛木沢遺跡	125	散布地	縄文	前期。	文献2
9	長畝I遺跡	126	散布地	縄文	中期。平成15年度調査(町)。平安住居1軒、土坑4基検出。	文献2,13
10	長畝II遺跡	127	集落跡	縄文	石斧採集。平成2・21年度調査(町)。前期住居跡2軒・中期後半住居跡2軒等検出。	文献2,4,20,32
11	長畝III遺跡	128	散布地	平安		文献1,2
12	萩原I遺跡	129	散布地	平安		文献1,2,26
13	萩原II遺跡	130	散布地	縄文・平安	縄文中期。	文献2
14	蛇籠I遺跡	131	散布地	縄文		文献2
15	蛇籠II遺跡	132	散布地	縄文・平安	縄文後期。	文献2
16	山岸I遺跡	133	散布地	平安	チャート片採集。	文献2
17	山岸II遺跡	134	集落跡	縄文・弥生・平安	平成24年度調査(町)。縄文前期末土坑1基、平安時代住居跡1軒、陥し穴3基検出。	文献2,22
18	外輪原I遺跡	135	散布地	縄文・弥生・平安	平成15・16年度調査(町)。縄文早期包含層検出。遺跡内に『上毛古墳総覧』記載の「五輪塚」があったが現在はほぼ消失。	文献1,2,13,15,26,34,35 『県遺跡地図』No.3120
19	北沢I遺跡	136	散布地	縄文・平安	縄文中・後期。	文献2
20	北沢II遺跡	137	散布地	縄文・平安	縄文中・後期。黒曜石片・内黒土器採集。	文献2,
21	上ノ平遺跡	138	散布地	縄文・弥生・平安	縄文前期～後期。弥生中期土器・太形蛤刃石斧等採集。平成24年度調査(町)。	文献1,2,24,26 『県遺跡地図』No.3122
22	与喜屋I遺跡	139	散布地	縄文	石斧2片採集。	文献1,2
23	与喜屋II遺跡	140	散布地	縄文	中期。土器片採集。	文献2 『県遺跡地図』No.3121
24	外輪原II遺跡	141	散布地	縄文	磨石・敷石採集。	
25	所舟遺跡	142	散布地	不明		文献2
26	旧新井村跡	143	村落跡	近世	昭和55年度調査(町)。天明泥流に埋没した村落。屋敷跡や用水池などを検出。南側台地上に墓が残る。	文献2,31,40,43
27	長野原一本松遺跡	63	集落跡	縄文・弥生・古墳・平安・中世・近世	平成17・22年度調査(町)、平成6～20年度調査(事)。縄文中期後半～後期の住居跡を中心とする拠点集落跡。平安時代住居跡、中世掘立柱建物跡等多数検出。	文献2,16,20,44～49
28	東貝瀬III遺跡	66	散布地	縄文・弥生・平安・近世	チャート片採集。平成24～26年調査(町)。天明畑・平坦面検出。	文献2
29	貝瀬I遺跡	67	散布地	縄文・平安	石斧採集。	文献2
30	貝瀬II遺跡	68	散布地	縄文		文献2
31	貝瀬III遺跡	69	散布地	縄文・平安		文献2
32	居家以岩陰群	80	その他	縄文・弥生	平成26年度～学術調査(國學院大學)。縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器・陶磁器・人骨・獣骨等出土。岩陰5カ所にわたる。	文献2
33	油郎岩陰群	81	その他	縄文・弥生	岩陰4カ所にわたる。	文献2
34	貝瀬岩陰群	82	その他	不明	岩陰2カ所にわたる。	文献2
35	嶋木I遺跡	72	集落跡、その他	平安・近世・近代	平成16・22・24～26年度調査(町)。天明畑・礎石建物・平坦面検出。旧国鉄太子線ガーター橋橋台石積み検出。	文献2,15,21,43
36	嶋木II遺跡	73	散布地	縄文・平安	黒曜石・磁器採集。平成26年度調査(町)。	文献2
37	嶋木III遺跡	74	散布地	縄文	石鏃・石鏃採集。	文献2
38	向原遺跡	75	集落跡	縄文・弥生・平安	平成5・19・20年度調査(町)。縄文後期住居5軒(敷石住居2軒)・縄文中期後半埋土2基、弥生中期土坑7基、平安住居11軒・陥穴14基、時期不明土坑52基検出。	文献2,6,18,19,32
39	長野原城跡	85	城館跡	中世・近世	吾妻川左岸、町の市街地北側の尾根上に立地。土塁・堀切・物見台などが遺存している。長野原合戦の舞台。平成24年度調査(町)、平成23年度調査(事)。天明畑検出。	文献1,2,26,27,30,50,51
40	町遺跡	219	その他	近世	平成23・24年度調査(事)。天明泥流に埋没した建物跡1棟・畑7枚のほか、畑下の土坑4基・小鍛冶跡等に関連した羽口や鉄サイ集中箇所1カ所を検出。平成25・26年度調査(町)。屋敷跡・畑・溝・炉跡を検出。	文献51
41	遠西岩陰群	83	その他	不明	岩陰2カ所にわたる。	文献2
42	小林家屋敷跡	211	屋敷跡	近世	平成13・14年度調査(町)。天明泥流に埋没した吾妻の分限者小林助右衛門の屋敷跡。石垣1基・土蔵跡1棟・礎石建物跡2棟を検出。	文献1,11,12,14,40,42,43
43	坪井遺跡	86	集落、墓その他	縄文・弥生・古墳・平安・中世	平成3・10・12・14・23・24・26年度調査(町)。縄文中期後半の拠点集落。縄文前期初頭住居跡・土坑、後期前葉土坑、弥生中期住居跡・土坑、平安住居・陥穴、中世配石・集石遺構などを検出。遺跡内に『上毛古墳総覧』記載の「鉄塚」あり。	文献1,2,4,8,10,12,23,24,38,39,41 『県遺跡地図』No.3123

No.	遺跡名	町No.	種別	時代	概要	備考
44	草木原遺跡	87	散布地 その他	縄文・平安・近世	縄文中期。磨製石斧採集。平成17・20年度調査(町)。天明畑1枚・溝1条検出。	文献1,2,16,19,26
45	高平遺跡	88	散布地	縄文・平安		文献2
46	寺久保遺跡	89	散布地	縄文・弥生・平安	黒曜石片・弥生後期土器片採集。	文献2
47	寺沢遺跡	90	散布地	縄文	中期。	文献2
48	勘場木石器時代住居跡	91	集落跡	縄文	県指定史跡。昭和29年度調査(県)。中期後半の住居跡1軒を検出。前期～後期の遺物が多数出土。本町で最初の本格的な発掘調査である。住居跡出土土器は長野県の影響を強く受けており、本地域の当該期土器の様相をいち早く報告した意義は大きい。	文献1,2,26,27,29,32,37 『県遺跡地図』No.3125
49	熊野遺跡	92	散布地	縄文	中期。平成15年度調査(町)。	文献2,13
50	弁天遺跡	93	散布地	平安		文献2
51	鹿生遺跡	94	散布地	縄文	中期。石器片採集。	文献2
52	立石遺跡	95	散布地	縄文・平安	縄文中・後期。磨製石斧・石鏃・石匙・石錘採集。平成16年度調査(町)。縄文中期包含層検出。	文献1,2,15,26 『県遺跡地図』No.3125
53	クヌギI遺跡	96	散布地	縄文・平安		文献2
54	クヌギII遺跡	97	集落跡	縄文	昭和63年度調査(町)。中期中葉～後期。住居跡4軒(うち敷石住居3軒)、中期中葉の埋設土器など出土。	文献2,3,33
55	赤羽根遺跡	98	散布地	縄文・平安	縄文中期。石匙採集。	文献1,2
56	大久保I遺跡	99	散布地	縄文	中期。	文献2
57	大久保II遺跡	100	散布地	不明		文献2
58	羽根尾I遺跡	112	散布地	平安		文献2
59	羽根尾宮原遺跡	113	散布地	平安	平成18・25年度調査(町)。	文献2,17,25 旧宮原遺跡
60	小滝I遺跡	114	散布地	平安		文献2 旧小滝遺跡
61	羽根尾II遺跡	115	散布地	奈良		文献2
62	小滝II遺跡	220	その他	近世	平成23年度調査(町)。天明畑検出。	文献23
63	宮の上遺跡	116	散布地	平安		文献2
64	暮坪遺跡	117	集落跡	縄文・平安	縄文中期土器・磨製石斧・凹石採集。平成12年度調査(町)。縄文前期前葉(二ツ木式期)住居跡2軒・土坑2基などを検出。	文献2,9,10
65	羽根尾城跡	123	城館跡	中世	町指定史跡。吾妻川左岸、城峯山の山頂に立地。梯郭式の山城で土塁・堀切が遺存している。羽根尾(海野)氏の拠城。	文献1,2,26,27,30
66	田之平遺跡	119	散布地	縄文	中期。	文献2
67	諏訪原遺跡	121	散布地	縄文	チャート片・石皿採集。	文献2

## (2) 縄文時代

縄文時代になると遺跡数も膨大となる。吾妻川及びその支流沿岸の下位段丘面は低調だが主として中・上・最上位河岸段丘および丘陵部に集落が展開する。

### ① 草創期～早期

現在のところ、長野原町で人々の生活が確認されているのは草創期末～早期初頭からである。該期の遺跡として石畑I岩陰<sup>(5)</sup>がある。昭和53年に群馬県教育委員会により一部調査され、中期を除く草創期～晩期の土器片・獣骨などが出土している。特に草創期～早期の土器片には表裏縄文・撚糸文・押型文が認められる。今年度から國學院大學により学術調査が実施された居家以岩陰群(32)でも後期を除く早期～晩期の土器片・石器・獣骨などが出土している<sup>(6)</sup>。横壁勝沼遺跡<sup>(7)</sup>では草創期の槍形尖頭器が表採されている。近年、丘陵上での調査機会も増え、楡木II遺跡<sup>(8)</sup>、立馬I遺跡<sup>(9)</sup>、立馬III遺跡<sup>(10)</sup>で早期の集落が検出されている。楡木II遺跡では早期前半撚糸文期の住居跡が31軒検出され、遺構外で表裏縄文・押型文・沈線文・条痕文土器片も出土している。該期の住居跡検出数では県はもとより全国的にも有数である。また立馬I遺跡では撚糸文期の住居跡の他、沈線文(田戸下層式)期の住居跡も検出され、遺構外では押型文・条痕文をはじめ晩期までの土器片が連綿と出土している。立馬III遺跡では子母口式や稲荷台式、沈線文土器などの住居跡が検出されている。さらに同時期の遺物は、調査事例の多い東部地区に偏っており、三平I遺跡<sup>(11)</sup>、三平II遺跡<sup>(12)</sup>、花畑遺跡<sup>(13)</sup>、中棚I遺跡<sup>(14)</sup>、幸神遺跡<sup>(15)</sup>、横壁中村遺跡<sup>(16)</sup>、長野原一本松遺跡(27)、西部地区では坪井遺跡(43)で確認されているのみである。それまでの岩陰での生活から早期前半撚糸文期になると丘陵上のオープンサイトでの集落に移行していくようである。また石畑I岩陰に代表される岩陰遺跡は丘陵部の自然に迫り出した岩場を利用して居住・墓域とするものであるため、県内では分布・遺跡数ともに限定される。吾妻川流域はそのほとんどが河川や溪沢に沿う山岳傾斜地帯であることから岩陰遺跡の立地する条件を満たしているといえよう。岩陰遺跡は長野原町域で21遺跡34ヶ所確認されており、その大半がこの東部地区に集中している。この岩陰遺跡の多さは本町の原始古代の大きな特徴の一つでもある。

## ②前期

前期の遺跡も少ないが漸増の傾向にある。立地は丘陵上が多いが、河岸段丘へも集落が広がる傾向が見受けられる。前期前半の遺跡は東部地区より西部地区で顕著である。坪井遺跡(43)で前期初頭(花積下層式期)の住居跡と土坑が検出され、土坑内で花積下層式と長野県で主体的な塚田式との共伴が確認された。暮坪遺跡(64)では前期前葉(二ツ木式期)の住居跡、長畝Ⅱ遺跡(10)では前期前葉(関山式期)の土坑と前期前葉(黒浜式期)の住居跡・土坑が検出されている。東部地区では上原Ⅰ遺跡<sup>(17)</sup>で前期初頭の住居跡が9軒、楡木Ⅱ遺跡で前期前葉(黒浜式期)の住居跡が検出されている他、横壁中村遺跡では埋没河道で少量の破片が認められている。前期後半は楡木Ⅱ遺跡、三平Ⅰ遺跡、林中原Ⅰ遺跡<sup>(18)</sup>で前期後葉(諸磯式期)の住居跡や土坑、川原湯勝沼遺跡<sup>(19)</sup>で前期末葉の土坑が検出されている以外は遺構外の出土である。

## ③中期

中期の遺跡は他時期に比して最も多い。中期前半は県内でも極めて限られた検出事例で少ないが、丘陵上あるいは最上位段丘に占地しているようである。後半になると河岸段丘の平場を中心として積極的な居住区域を展開している。中期前半の集落は近年東部地区の丘陵上あるいは最上位段丘の遺跡で発見されはじめている。中期初頭(五領ヶ台式期)の遺跡は楡木Ⅱ遺跡で住居跡3軒、上原Ⅱ遺跡で屋外焼土遺構を伴う竪穴状遺構が3基・土坑21基、上原Ⅳ遺跡で土坑1基が確認されている<sup>(20)</sup>。中期前葉(阿玉台式期)の遺跡は立馬Ⅱ遺跡<sup>(21)</sup>で五領ヶ台式期～阿玉台式期の住居跡11軒・土坑100基ほど、林中原Ⅰ遺跡<sup>(22)</sup>で住居跡が1軒、幸神遺跡<sup>(23)</sup>で土坑が検出されている。横壁中村遺跡<sup>(24)</sup>では中期中葉(勝坂式期)の住居跡、西久保Ⅰ遺跡<sup>(25)</sup>では同時期の土坑が確認されている。中期中葉(焼町類型期)の遺跡は幸神遺跡で焼町土器の深鉢を炉体土器とした住居跡、林中原Ⅱ遺跡<sup>(26)</sup>と横壁中村遺跡では焼町土器を主体とする住居跡がそれぞれ1軒ずつ確認されている他、上ノ平Ⅰ遺跡<sup>(27)</sup>では同時期の住居跡が12軒検出された。西部地区では本遺跡で初めて中期前葉の住居跡が検出された。クヌギⅡ遺跡(54)で中期中葉の埋設土器、山岸Ⅱ遺跡(17)で遺構外で少量の破片が認められているのみである。中期後半になると列石を伴う拠点集落が吾妻川流域地帯に分布を広げて出現する。長野原一本松遺跡(27)、横壁中村遺跡<sup>(28)</sup>を筆頭として近年の調査により石川原遺跡<sup>(29)</sup>、林中原Ⅰ遺跡、林中原Ⅱ遺跡が新たに加わり<sup>(30)</sup>、西部地区では坪井遺跡(43)に代表される。遺跡を大規模に調査している前5者に共通するのは中期後半に引き続き、後期前半(～加曾利B式期)まで継続して集落が営まれていることである。また坪井遺跡は前2者に比して規模は小さいが、弧状石列1基、住居跡19軒(拡張住居含む)、土坑49基が検出されている。土器は大きく4系統(①加曾利E式土器<北関東系>、②曾利・唐草文系土器<信州系>、③郷土式土器<①と②の融合型式>、④栃倉Ⅱ式土器<越後系>)が認められ、特に③の郷土式土器が該期の主体となる時期であり、環浅間山地域に分布し、小文化圏を形成していることが最近分かってきている。この坪井遺跡出土土器の傾向は前4者出土土器、さらに県指定史跡「勘場木石器時代住居跡」(48)出土土器にも看取される。その他、向原遺跡(38)では中期末～後期初頭の敷石住居跡が検出されており、立地から拠点集落のひとつになる可能性が高い。最近の調査では尾坂遺跡<sup>(31)</sup>で中期後半の住居跡が6軒検出されており、うち3軒が敷石住居で出現期の可能性がある。

## ④後期

後期の遺跡は規模は縮小するものの吾妻川流域の比較的広い範囲に分布する。ただし遺構の検出は後期前半までで後半は不明である。上記の中期後半の遺跡の他、西部地区では本町で初めて敷石住居跡を検出したクヌギⅡ遺跡(54)、向原遺跡(38)、滝原Ⅲ遺跡(5)、古屋敷遺跡<sup>(32)</sup>、東部地区では上原Ⅳ遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡、林中原Ⅰ遺跡<sup>(33)</sup>に代表される。後期初頭(称名寺式期)～後期中葉(加曾利B式期)までの敷石住居跡、掘立柱建物跡は長野原一本松遺跡(27)、横壁中村遺跡で多く検出されている。長野原一本松遺跡では壁に板材の痕跡を遺す柄鏡形敷石住居跡や方形周礫を明瞭に遺す柄鏡形敷石住居跡が確認されている。また横壁中村遺跡では主軸全長9mにも及ぶ大形の柄鏡形敷石住居跡や配石墓群が検出されている。その他、林中原Ⅰ遺跡、上原Ⅳ遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡

でも後期初頭～前葉（称名寺式期～堀之内式期）の敷石住居跡等が検出されている。後期後葉（高井東式期）の住居跡は横壁中村遺跡で3軒検出されているのみである。後期終末（安行1・2式期）に関しては横壁中村遺跡や立馬I遺跡で土器片が出土しているがいずれも遺構外である。

### ⑤晩期

晩期に関してはこれまで石畑I岩陰で土器片が出土している他、横壁中村遺跡で晩期末葉（千網式併行）の包含層が確認されているだけであった。遺構の検出は晩期前半は依然ないものの後半（特に末葉～弥生中期）に関しては最近の調査で増えつつある。立馬I遺跡では晩期末葉の住居跡1軒、横壁中村遺跡では晩期末葉の住居跡2軒、埋甕1基、上原IV遺跡では土坑1基が検出されている。立馬I遺跡では南信松本盆地に分布する女鳥羽川式土器が出土している。さらに川原湯勝沼遺跡からは該期の土坑が数基検出され、その中の1基は壺棺再葬墓であることが判明している。同一土坑に2個体が埋置されており、ひとつが中沢氏のいう「氷式突帯壺」<sup>(34)</sup>の上半部が逆位に、もう一方は浮線文系の半精製甕が正位の状態出土している。この壺棺再葬墓は東日本でも最古級として注目されよう。その他、遺構外ではあるが久々戸遺跡<sup>(35)</sup>で氷式土器の浅鉢、向原遺跡<sup>(38)</sup>で大洞A'式まで遡ると考えられる土器片も確認されている。

## (3) 弥生時代

弥生時代の遺跡は分布調査の時点で後期に属する3遺跡のみであったが、縄文時代晩期末葉から弥生中期前半までの資料が増えてきている。遺跡は丘陵上あるいは最上位段丘に立地する傾向が強く、縄文時代早期や中期前半と共通しているようである。東部地区では長野原一本松遺跡<sup>(27)</sup>では中期前半までと考えられる土坑1基、横壁中村遺跡では埋甕（再葬墓か）1基が検出され、東海地方に分布する檜王式土器の甕が出土している。下原遺跡<sup>(36)</sup>では集石遺構から中期前半を中心とした遺物が認められた。未報告ではあるが、林中原II遺跡<sup>(37)</sup>では中期前半と考えられる住居跡4軒の他、前期末に遡る土坑墓（再葬墓か）、尾坂遺跡でも前期末の再葬墓と思われる土坑や完形土器2個体を出土する土坑、貯蔵穴など、上原I遺跡<sup>(38)</sup>では前期末の短頸壺を納めた土坑、三平I遺跡では前期末～中期前半の土坑が数基検出されている。西部地区では遺物出土量が少なく時期が判然としないものが多いが、坪井遺跡<sup>(43)</sup>でも中期初頭と考えられる住居跡1軒、土坑が5基、向原遺跡<sup>(38)</sup>では前期に遡るものも含めて中期前半までの土坑が7基確認されている。遺構外では外輪原I遺跡<sup>(18)</sup>、上ノ平遺跡<sup>(21)</sup>で中期前半までの資料が比較的まとまっている。中期後半に関しては、立馬I遺跡で住居跡2軒と土器棺墓2基を含む土坑が数基、また坪井遺跡では栗林1式期の土坑1基、後期に関しては、石畑遺跡<sup>(39)</sup>で土坑1基が確認されているのみである。分布調査時に居家以岩陰群<sup>(32)</sup>、寺久保遺跡<sup>(46)</sup>、新田原I遺跡で土器片が表採されている他、立馬I遺跡では遺構外で、二社平遺跡<sup>(40)</sup>周辺で後期～古墳時代前期に比定される土器片が表採されている。

## (4) 古墳時代

これまで遺構外では他時期の遺物に混入するかたちで5世紀後半の土器片は坪井遺跡<sup>(43)</sup>、長野原一本松遺跡<sup>(27)</sup>、二社平遺跡などで確認されてきたが、長野原町で古墳時代の集落として把握されている遺跡は皆無であった。平成15年度に最上位段丘面に立地する林宮原遺跡<sup>(41)</sup>で5世紀末～6世紀初頭の住居跡が1軒検出されたのが初例である。これに続いて平成16年度の調査で川原湯勝沼遺跡で焼土を伴う土坑から同時期の土師器と遺構外で剣形模造品、下原遺跡でも同時期の住居跡1軒の他、土師器（片）がまとまって出土している。最近の調査では上原IV遺跡<sup>(42)</sup>でも5世紀後半～6世紀初頭の住居跡が2軒検出されている。これらは吾妻川に直面した最上位・中位段丘面の自然流路あるいはその周辺で出土していることから水に関連した祭祀遺構の可能性が高い。これら4遺跡で検出された遺構は時期的にほぼ合致しており注目される。さらに上原I遺跡<sup>(43)</sup>で前期と考えられる住居跡から台付甕や埴形土器が出土し、中期の高環を包含する土坑も検出され、これまで空白であった時期の遺構検出事例が徐々にではあるが大規模調査の成果として増えてきている。



また昭和13年に刊行された『上毛古墳綜覧』によれば、大津地区の「鉄塚」(43)、与喜屋地区の「五輪塚」(18)が前方後円墳と報告されている。また昭和11年刊行の『群馬県吾妻郡誌』では林地区の「御塚」が古墳とされ、合計3基が古墳とされている。「五輪塚」は現況で畑としてならされているが、「鉄塚」と「御塚」は円形の形状を保ち、現在は墓地として利用されている。その他、「てつか(てづか)」や林地区中棚にある「砂塚」に関しては『長野原町誌』で「宮内地区の「てづか」は鉄塚の訛音ではあるまいか。鉄塚の地名には城跡や屋敷跡などに多いといわれ、砂塚との対照がおもしろい」とあり、古墳という認識ではないが同じ林地区に少なくとも「塚」と付くものが3基あるということが注目される。いずれも古墳とするには根拠が薄く、今後の調査に期待したい。

## (5) 奈良・平安時代

奈良時代に該当する遺跡は分布調査時の羽根尾Ⅱ遺跡(61)のみで増えていない。これに対して平安時代の遺跡の分布は町内全域に及んでおり、縄文時代とともに本町で原始古代の中心をなす時期である。調査した遺跡を挙げれば、西部地区では、坪井遺跡(43)、向原遺跡(38)、長畝Ⅰ遺跡(9)、山岸Ⅱ遺跡(17)、東部地区では立馬Ⅰ遺跡、東原Ⅰ遺跡<sup>(44)</sup>、楡木Ⅰ遺跡<sup>(45)</sup>、楡木Ⅱ遺跡<sup>(46)</sup>、花畑遺跡<sup>(47)</sup>、下原遺跡、中棚Ⅰ遺跡<sup>(48)</sup>、上原Ⅰ遺跡<sup>(49)</sup>、上原Ⅲ遺跡<sup>(50)</sup>、上原Ⅳ遺跡<sup>(51)</sup>、林宮原遺跡<sup>(52)</sup>、上ノ平Ⅰ遺跡、三平Ⅰ遺跡、川原湯勝沼遺跡、横壁勝沼遺跡、横壁中村遺跡、長野原一本松遺跡(27)、尾坂遺跡などから住居跡や掘立柱建物跡、陥し穴などが検出され、該期集落として把握されている。この中で楡木Ⅱ遺跡では9世紀後半～10世紀前半の住居跡が38軒、竪穴遺構3基が検出され、「長」・「三家」の墨書土器と刻字「称」をもつ石製紡錘車、上ノ平Ⅰ遺跡では住居跡が20軒検出され、県内2例目となる皇朝十二銭「貞観永寶」が出土しており注目される。この他、未報告ではあるが、上原Ⅲ遺跡では鍛冶工房跡1軒・住居跡11軒・焼土遺構6基・陥穴29基など、中棚Ⅰ遺跡では住居跡4軒が検出され、そのうち全容が判明した2軒は一辺が6mを超える大形住居であった。このうちの1軒からは「赤」の墨書が大量に出土しておりその性格が注目される。

## (6) 中世

吾妻流域地帯には中世城館跡が点在している。その立地は当時の道との関連性が強く、分岐点の丘陵上など交通の要衝に多い。西から羽根尾城跡(65)、長野原城跡(39)、丸岩城跡<sup>(53)</sup>、柳沢城跡<sup>(54)</sup>、金花山砦跡<sup>(55)</sup>などがあり、その他に林城跡<sup>(56)</sup>、林の烽火台<sup>(57)</sup>などといわれている箇所も存在する。これらはいずれも山城である。この中で丸岩城は「丸屋の要害」として『加沢記』にも記され、節理の発達した岩山の山頂に立地している。この丸岩城跡の北西麓に里城としての柳沢城跡が位置し、山城部と丘城部から成る本城を構えている。この柳沢城跡の一部が発掘調査されており、郭跡・堀切・土居・礎石建物・腰曲輪・石組遺構・溝・柵列などが検出されている。遺物のほとんどが礎石建物から出土しておりかつ豊富である。陶器・鉄製品・銅製品・石臼などが出土しており、特に陶器類は常滑系大甕・古瀬戸三耳壺・古瀬戸菊皿・珠洲系陶器甕の他、輸入陶磁器である景德鎮窯梅瓶などが準完形で出土している。また最近の調査で林中原Ⅰ遺跡範囲内に林城跡が確認され、その範囲や構造が明らかになりつつある。金花山砦跡は明治期の絵図『川原湯真図』に「トリデアト」の記載があったことから平成12年度に町教委と事業団で踏査して堀切などを確認した。

近年は河岸段丘面の遺跡でも該期の遺構が検出されはじめており、集落として把握されるようになっていく。それらを列挙すると立馬Ⅰ遺跡、楡木Ⅱ遺跡、二反沢遺跡<sup>(58)</sup>、下原遺跡、林宮原遺跡、横壁中村遺跡、西久保Ⅰ遺跡、長野原一本松遺跡(27)、尾坂遺跡となる。このうち、横壁中村遺跡と下原遺跡では石垣で区画された屋敷跡がそれぞれ1棟、長野原一本松遺跡では掘立柱建物群と竪穴状遺構、楡木Ⅱ遺跡でも掘立柱建物群、二反沢遺跡では区画跡のほか羽口や鉄サイなど鍛冶関連遺構などが検出されており注目される。

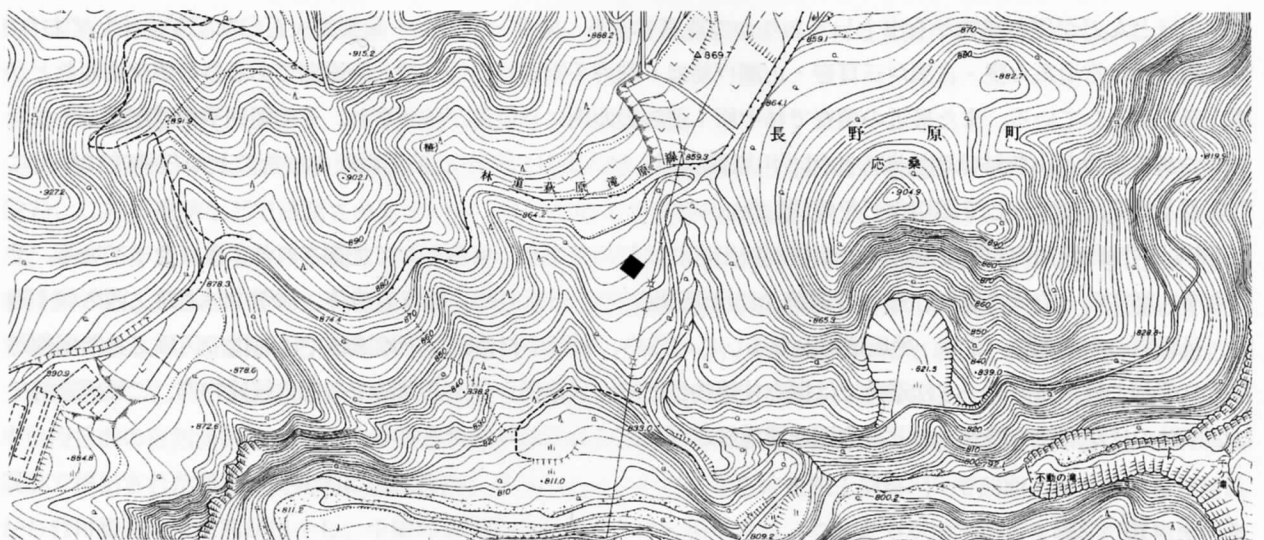
## (7) 近世

長野原町は浅間火山・白根火山の麓に位置し、古くから度重なる火山災害を被っていることが地層からも窺え

る。浅間火山の主な噴火活動を概観すれば、すでに9万年前には黒斑山は活動をはじめており、2.4～2.1万年前に黒斑山崩壊を伴う噴火活動があった。その時発生した泥流は、応桑泥流・中之条泥流・前橋泥流と確認された地点ごとに異なる名称で呼ばれている。その後は仏岩火山の活動期で浅間板鼻黄色軽石（As-YP）降下をもたらした。1万年前頃から前掛山の活動が始まり、その噴火により縄文時代中期の浅間D軽石（As-D）、4世紀の浅間C軽石（As-C）、天仁元（1108）年の浅間B軽石（As-B）、天明3（1783）年の浅間A軽石（As-A）という4つの大きなテフラがもたらされた。これらは、浅間山の活動史を如実に物語る証であり、群馬県内の考古年代の指標にもなっている。その中でも天明3（1783）年の噴火は軽石降下後に襲った泥流（鎌原火砕流）により吾妻川・利根川流域沿いの町村に甚大な被害をもたらし、有史以来の記録的火山災害として知られている。この泥流によって埋没した嬭恋村の旧鎌原村が昭和54年から調査され、「延命寺観音堂の石段」、「十日ノ窟」など天明の大噴火における被災遺跡として注目を集めたが<sup>(59)</sup>、翌年に本町でも山間地域若者定住環境整備モデル事業として陸上自衛隊によるグランド造成中に日待供養塔・石臼・農具などが出土し、旧新井村跡（26）の痕跡が確認された。平成14年度には町立中央小学校の屋内体育館・プールの新築に伴って、当時の分限者小林助右衛門屋敷の一部が発見され（42）、石垣・土蔵・礎石建物跡が調査されている。また平成16年度には長野原市街地における下水道工事で建築部材・葉缶・鉄釜・石臼の他、「青面金剛塔」が泥流中から出土しており、旧長野原村が壊滅的状况であった一端を垣間見る発見があった<sup>(60)</sup>。

近年、ダム関連工事に伴う発掘調査により、これまで認識されていなかった下位・中位段丘で泥流に埋もれた遺跡が相次いで発見された。それらを列挙すると、嶋木I遺跡（35）、東貝瀬Ⅲ遺跡（28）、町遺跡（40）、下田遺跡<sup>(61)</sup>、下原遺跡<sup>(62)</sup>、中棚Ⅱ遺跡<sup>(63)</sup>、西宮遺跡<sup>(64)</sup>、東宮遺跡<sup>(65)</sup>、石川原遺跡、西ノ上遺跡<sup>(66)</sup>、川原湯勝沼遺跡、横壁勝沼遺跡、横壁中村遺跡、西久保Ⅳ遺跡<sup>(67)</sup>、尾坂遺跡<sup>(68)</sup>、久々戸遺跡<sup>(69)</sup>などがあり、現在も継続調査中である。これらの遺跡では主として畑跡・ヤックラ・道・石垣・溝・井戸・覆屋構造物などが検出されている。現時点での成果として天明泥流に埋まった畑景観の復原や「ツカ」や平坦面から推定される「単位畑」の構造、さらには泥流とその逆級化構造のメカニズムなどに関して詳細な検討がなされている。また東宮遺跡、西宮遺跡、尾坂遺跡、下田遺跡などでは民家跡も検出されている。特に東宮遺跡は泥流に埋没した川原畑村を面的に調査した貴重な発見である。建物跡が14棟のほか畑20区画・道3条・溝6条・石垣10基・集石1基・土坑8基を検出した。通常遺存しない建築部材や漆器など植物遺存体の検出例が多く、当時の川原畑村の景観復原はもとより、近世建築学、民俗学など多角的な分析に寄与する部分が大きいと考えられる。さらに隣接する西宮遺跡では埋没畑とともに南北方向に10数本の復旧溝が検出され、被災後の復旧の痕跡が本町ではじめて確認された。

また推定される泥流到達範囲外でも該期の遺構・遺物は確認されている。林中原Ⅱ遺跡<sup>(70)</sup>、上原Ⅳ遺跡、楡木Ⅰ遺跡、二反沢遺跡、幸神遺跡、長野原一本松遺跡（27）が該当する。このうち林中原Ⅱ遺跡と楡木Ⅰ遺跡では



第2図 調査地点位置図 (S=1/5,000)

近世礎石建物跡、上原IV遺跡では溝（旧河川流路）を検出しているがそこから下駄や曲物の底・農具・石鉢・陶磁器など生活道具が出土している。

### 第3節 基本土層

本遺跡の基本土層は第4図のA地点で確認した。発掘調査での所見と併せると以下ようになる。

#### 第I層 暗灰褐色土

いわゆる表土で、上位は畑の耕作土である。拳大の礫を多く含む。締まりは上位が弱く、下位はやや強い。

#### 第II層 暗褐色土

黄褐色軽石を多く含んでいる。締まりは強い。全体的に茶褐色を呈しているが上位は黒色味が強い。

#### 第III層 暗褐色土

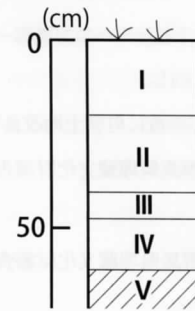
黄褐色軽石およびローム粒を多く含んでおり、縄文時代中期前葉の遺構はこの層中を掘り込んで構築されている。締まりは強い。

#### 第IV層 明褐色土

いわゆる漸移層で、締まりは強い。

#### 第V層 黄褐色土

いわゆる関東ローム層でスコリアを少量含んでいる。粘性・締まりともに強い。



第3図 基本土層 (S = 1/20)

### 註

1. 長野原町教育委員会 1990『長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査—』長野原町埋蔵文化財調査報告第1集
2. 主に下位・中位段丘で発見された天明泥流に埋もれた遺跡を追加・範囲拡張した他、遺跡名の変更を実施した。その改訂版の詳細については「マッピングぐんま 遺跡・文化財」(<http://www2.wagmap.jp/pref-gunma/top/select.asp&npr=ntp=86/pl=3>)で参照したい。本書では第1表および本章にできるだけ最新情報を記載した。
3. 長野原町教育委員会 2000~2014『町内遺跡I~XIV』
4. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004『新田西沢遺跡 新田平林遺跡』
5. 中隆之 1979『石畑遺跡概報』長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局  
笠懸野岩窟文化資料館 2000『第30回企画展 利根川流域の縄文草創期』  
原田昌幸 2007『日本の美術 No495 縄文土器 草創期 早期』至文堂
6. 平成26年度から継続的な学術調査を計画して実施された。現在の地表では5か所の岩陰が確認されており、今年度は西端の1号岩陰の岩陰部およびテラス部にトレンチを設定して掘り下げを行った。両トレンチで灰層を確認した段階までであるが、包含層からは後期を除く早期~晩期の縄文土器、弥生土器、土師器・須恵器、石器、陶磁器、獣骨・人骨等が出土している。繰り返し岩陰が利用されている状況が把握され、利用開始時期も草創期まで遡る可能性を残している。次年度以降の調査に期待したい。  
國學院大學考古学研究室 2014「居家以岩陰遺跡発掘調査現地説明会」レジュメ
7. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2002『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
8. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009『楡木II遺跡(2)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第27集
9. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006『立馬I遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集

10. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009『立馬Ⅲ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第26集
11. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007『三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第13集  
長野原町教育委員会 2013『三平Ⅰ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第26集
12. 註11と同じ。
13. 註7と同じ。
14. 平成23年度に町営土地改良事業に伴い発掘調査を実施した際、早期後半の土坑が検出されている。今年度報告書刊行予定である。
15. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008『幸神遺跡・上原Ⅳ遺跡・山根Ⅲ遺跡(2)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第17集
16. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2012『横壁中村遺跡(12)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第37集
17. 平成24年度に町営土地改良事業に伴い発掘調査を実施した際、前期初頭花積下層式期に併行する住居跡が検出された。土器は花積下層式と塚田式が共伴しており、両者が融合したものも存在するようである。今年度報告書刊行予定である。
18. 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2014『長野原城跡・林中原Ⅰ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書第43集  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010『年報29』
19. 註7と同じ。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2005『川原湯勝沼遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
20. 上原Ⅱ遺跡は平成23年度、上原Ⅳ遺跡は平成24年度に町営土地改良事業に伴い発掘調査を実施した。今年度報告書刊行予定である。
21. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006『立馬Ⅱ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
22. 未報告。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『年報27』
23. 註15と同じ。
24. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2005『横壁中村遺跡(2)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
25. 註7と同じ。
26. 未報告。長野原町教育委員会 2009『町内遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第18集
27. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008『上ノ平Ⅰ遺跡(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第23集
28. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2005～2014『横壁中村遺跡(2)～(14)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5・7・10・20・22・29・30・34・37・41・44集
29. 未報告。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009『年報28』
30. 未報告。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008～2010『年報27～29』
31. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2011『年報30』
32. 長野原町 1976『長野原町誌』上巻
33. 長野原町教育委員会 2010『林中原Ⅰ遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第20集
34. 中沢道彦 1998「氷1式」の細分と構造に関する試論『長野県小諸市氷遺跡発掘調査資料図譜』第三冊 氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会
35. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2004『久々戸遺跡(2)・中棚Ⅱ遺跡(2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

36. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007『下原遺跡Ⅱ』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書  
第12集
37. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による平成21年度の調査で検出された。また同じ時期に長野原町教育委員会でも隣接地を調査した際、弥生時代中期前半を中心とした竪穴状遺構1基のほか数基の土坑が検出された。  
長野原町教育委員会 2011『町内遺跡X』長野原町埋蔵文化財調査報告第21集
38. 註17と同じ。弥生時代前期末の土坑が検出されている。短頸壺は胴上半に変形工字文、胴下半～底面にはヘラ描横線が施されている。また周辺には遺構外ながら同時期の高坏片も出土している。
39. 註7と同じ。
40. 註7と同じ。
41. 長野原町教育委員会 2004『林宮原遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第14集
42. 註20と同じ。そのうち1軒は豊富な遺物の出土が見られ、同時期のセット関係の把握ができそうである。
43. 註17・38と同じ。
44. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2010『東原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第35集
45. 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2012『楡木Ⅰ遺跡・上原Ⅳ遺跡(2)・西久保Ⅳ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第39集  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010『年報29』
46. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008『楡木Ⅱ遺跡(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
47. 註7と同じ。
48. 註14と同じ。
49. 註17・38と同じ。
50. 平成23年度に町営土地改良事業に伴い発掘調査を実施した際、平安時代の集落跡が検出された。そのうち1軒は鍛冶炉を伴う工房跡であることが判明した。  
富田孝彦 2014「上原Ⅲ遺跡の鍛冶工房跡」『ぐんま地域文化』第42号 一般財団法人群馬地域文化振興会
51. 註17・38と同じ。
52. 長野原町教育委員会 2004『林宮原遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第14集  
長野原町教育委員会 2012『林宮原遺跡Ⅶ』長野原町埋蔵文化財調査報告第23集
53. 文献1・2・26・27・30。
54. 長野原町教育委員会 1995『柳沢城跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第4集  
その他参考文献は、文献1・2・26・27・30・32。
55. 文献2。
56. 註18と同じ。長野原町でも平成25年度に町営土地改良事業に伴う発掘調査を実施した。今年度報告書刊行予定である。  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009・10『年報28・29』  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『遺跡は今』第16号  
2010『遺跡は今』第18号
57. 文献30。
58. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006『上郷B遺跡 廣石A遺跡 二反沢遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
59. 嬭恋村教育委員会 1981『鎌原遺跡発掘調査概報 浅間山噴火による埋没村落の研究』  
嬭恋村教育委員会 1994『埋没村落 鎌原遺跡発掘調査概報(よみがえる延命寺)』
60. 未報告。これら長野原市街地の被災の状況から後述する町遺跡(40)と同一遺跡になると考えられる。水特法関連事業に関して

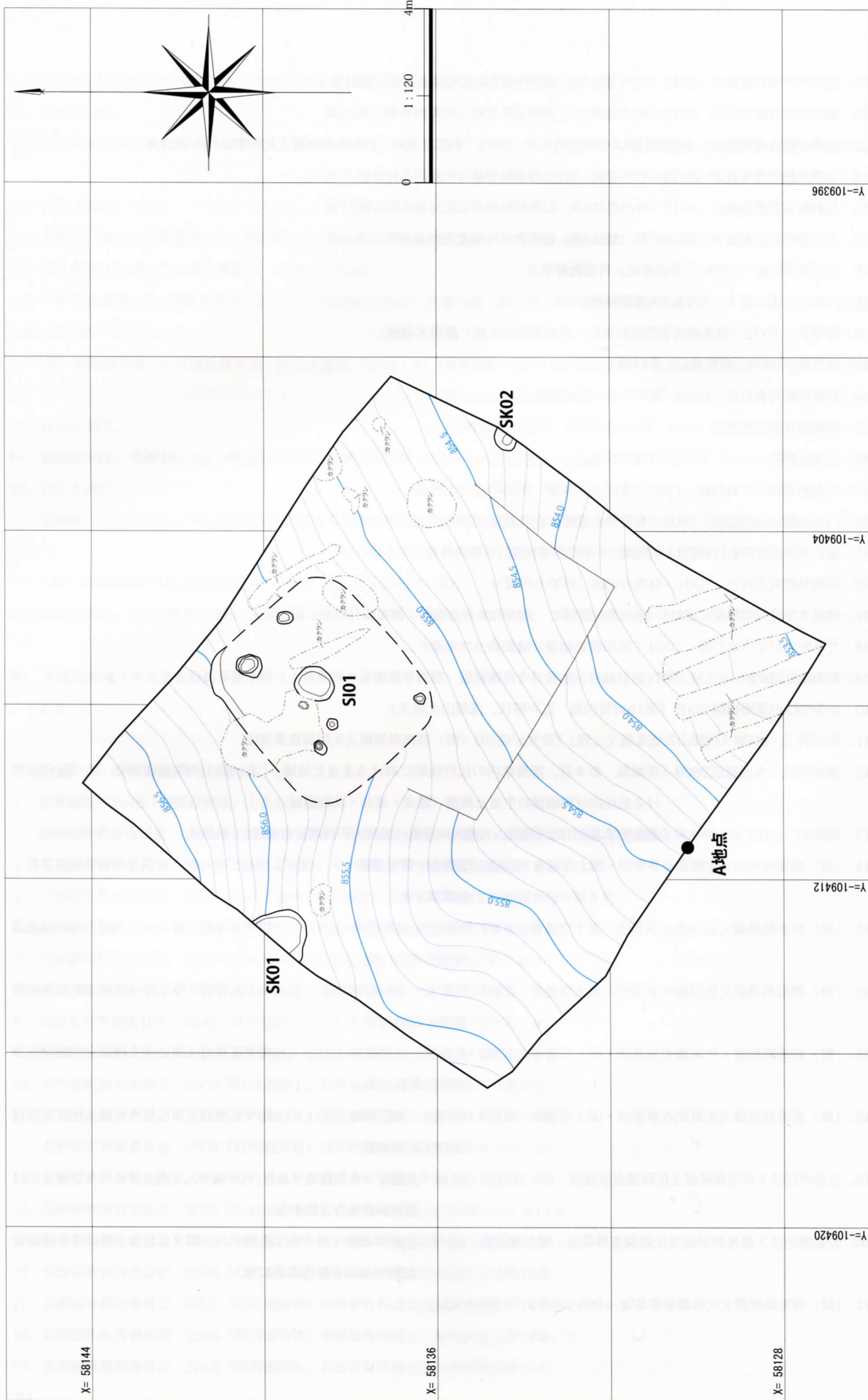
は別稿により報告する予定である。なお、「青面金剛塔」は雲林寺参道に安置してある。

61. 註7と同じ。
62. 註7・36と同じ。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2003『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』  
八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
63. 註62と同じ。
64. 未報告。今年度も事業団により発掘調査が実施され、天明期の屋敷跡・作業小屋・厠・畑などが検出されている。  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009『年報28』
65. 今年も事業団により発掘調査が実施され、天明期の屋敷跡・作業小屋・厠・溝・畑・道・石垣が検出されている。これまでの成果は以下の通りである。  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2011・12『東宮遺跡(1)・(2)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第34・38集
66. 註35と同じ。
67. 註45と同じ。文献16。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001・10『年報20・29』
68. 註7と同じ。  
群馬県・公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012『尾坂遺跡』社会資本整備総合交付金事業(活力創出基盤整備)  
長野原草津口駅舎整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007～2011『年報26～30』
69. 註62と同じ。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998『長野原久々戸遺跡』県道長野原草津口停車場線道路(橋梁)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
70. 平成25年度に町営土地改良事業に伴って発掘調査を実施した際、近世の掘立柱建物跡2棟が検出された。今年度報告書刊行予定である。

#### 参考文献 (第1表の文献番号に対応)

1. 長野原町 1976『長野原町誌』上巻
2. 長野原町教育委員会 1990『長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査—』長野原町埋蔵文化財調査報告第1集
3. 長野原町教育委員会 1990『クヌギⅡ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第2集
4. 長野原町教育委員会 1992『長畝Ⅱ遺跡 坪井遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第3集
5. 長野原町教育委員会 1995『柳沢城跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第4集
6. 長野原町教育委員会 1996『向原遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第5集
7. 長野原町教育委員会 1998『滝原Ⅲ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第6集
8. 長野原町教育委員会 2000『坪井遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第7集
9. 長野原町教育委員会 2001『暮坪遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第8集
10. 長野原町教育委員会 2002『町内遺跡Ⅰ』長野原町埋蔵文化財調査報告第9集
11. 長野原町教育委員会 2003『町内遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第10集
12. 長野原町教育委員会 2003『町内遺跡Ⅲ』長野原町埋蔵文化財調査報告第11集
13. 長野原町教育委員会 2004『町内遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第13集
14. 長野原町教育委員会 2005『小林家屋敷跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第14集
15. 長野原町教育委員会 2005『町内遺跡Ⅴ』長野原町埋蔵文化財調査報告第15集
16. 長野原町教育委員会 2006『町内遺跡Ⅵ』長野原町埋蔵文化財調査報告第16集
17. 長野原町教育委員会 2007『町内遺跡Ⅶ』長野原町埋蔵文化財調査報告第17集
18. 長野原町教育委員会 2009『町内遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第18集
19. 長野原町教育委員会 2010『町内遺跡Ⅸ』長野原町埋蔵文化財調査報告第19集

20. 長野原町教育委員会 2011『町内遺跡X』長野原町埋蔵文化財調査報告第21集
21. 長野原町教育委員会 2012『町内遺跡XI』長野原町埋蔵文化財調査報告第22集
22. 長野原町教育委員会・東京電力株式会社群馬支店 2013『山岸Ⅱ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第24集
23. 長野原町教育委員会 2013『町内遺跡XⅡ』長野原町埋蔵文化財調査報告第25集
24. 長野原町教育委員会 2013『町内遺跡XⅢ』長野原町埋蔵文化財調査報告第27集
25. 長野原町教育委員会 2014『町内遺跡XⅣ』長野原町埋蔵文化財調査報告第28集
26. 小池富治郎編 1936『吾妻郡誌』吾妻教育学会
27. 山崎一・山口武夫 1972『吾妻郡城壘史』
28. 塩野新一 1972『群馬県吾妻郡長野原町(群馬県指定史跡) 勘場木遺跡』
29. 群馬県 1988『群馬県史』資料編1
30. 群馬県教育委員会 1988『群馬県の中世城館跡』
31. 群馬県立歴史博物館 1995『第52回特別展 天明の浅間焼け』
32. 上毛新聞社 1999『群馬県遺跡大辞典』
33. 笠懸野岩宿文化資料館 1999『第25回企画展 群馬の注口土器展』
34. 白石光男・山口逸弘 1999「外輪原Ⅰ遺跡出土の土器」『群馬県考古学手帳』9
35. 富田孝彦 2000「外輪原Ⅰ遺跡出土の弥生中期土器」『群馬県考古学手帳』10
36. 群馬県教育委員会 2001『群馬の史跡(原始古代編)』
37. 群馬大学教育学部編 2004『尾崎喜左雄博士 調査収集考古遺物・調査資料目録』雄山閣
38. 笠懸野岩宿文化資料館 2004『第39回企画展 底の尖った土器』
39. 群馬県立博物館 2004『第77回企画展 新発見考古速報展 群馬発掘情報 石室の入り口を通り抜けると・・・』
40. かみつけの里博物館 2007『第16回特別展 江戸時代、浅間山大噴火』
41. 関根慎二 2008「浅間山を廻る縄文土器」『研究紀要26』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
42. 黒澤照弘・大西雅広2009「茨城県、栃木県、群馬県内の江戸後期における生産と流通」『第19回九州陶磁器学会 江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通(関東・東北・北海道編)』
43. 関俊明 2010 シリーズ「遺跡を学ぶ」075『浅間山大噴火の爪痕—天明三年浅間災害遺跡』新泉社
44. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2002『長野原一本松遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
45. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007『長野原一本松遺跡(2)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
46. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008『長野原一本松遺跡(3)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第19集
47. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008『長野原一本松遺跡(4)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
48. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009『長野原一本松遺跡(5)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第28集
49. 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2013『長野原一本松遺跡(6)』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第40集
50. 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2014『長野原城跡・林中原Ⅰ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第43集
51. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995～2013『年報14～32』



第4図 調査区全体図 (S=1/120)



# 第3章 検出された遺構と遺物

## 第1節 竪穴式住居跡

SI01 (第5～9図、第2表/PL2・3・5)

位置 調査区北側。

重複関係 なし。

遺存状態 不良である。住居の北壁隅のみの遺存で、その他の壁は明確に捉えられなかった。また北西壁中央に樹木の抜根跡があり、床面を消失している。

覆土 北壁付近のみの遺存であるが、暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形態と規模 北壁隅の平面形と遺物の分布状況から、隅丸方形を呈していると考えられる。規模は主軸3.90m、副軸4.50m、確認面からの深さは最深19cm、床面積16.3㎡を測ると推定される。

主軸方位 N-38°-W。

床面 直床式で北西側から南東側へ傾斜している。明確な硬化面は確認されなかった。

壁・壁溝 壁は上述したとおり、北壁隅以外遺存していない。北壁は19cmの高さを有し、床面から外傾して立ち上がっている。壁溝は確認されていない。

柱穴 全体でP1～P5まで検出されているが、主柱穴といえるのはP1とP3ぐらいで、それぞれ43cm、39cmの深さを有している。その他は補柱と考えられる。平面形は円形～楕円形を基調とする。それぞれの規模を以下に示す。

第2表 SI01柱穴計測表

	P1	P2	P3	P4	P5
長軸 (cm)	35	26	60	36	27
短軸 (cm)	26	26	53	28	25
床面からの深さ (cm)	43	16	39	18	22

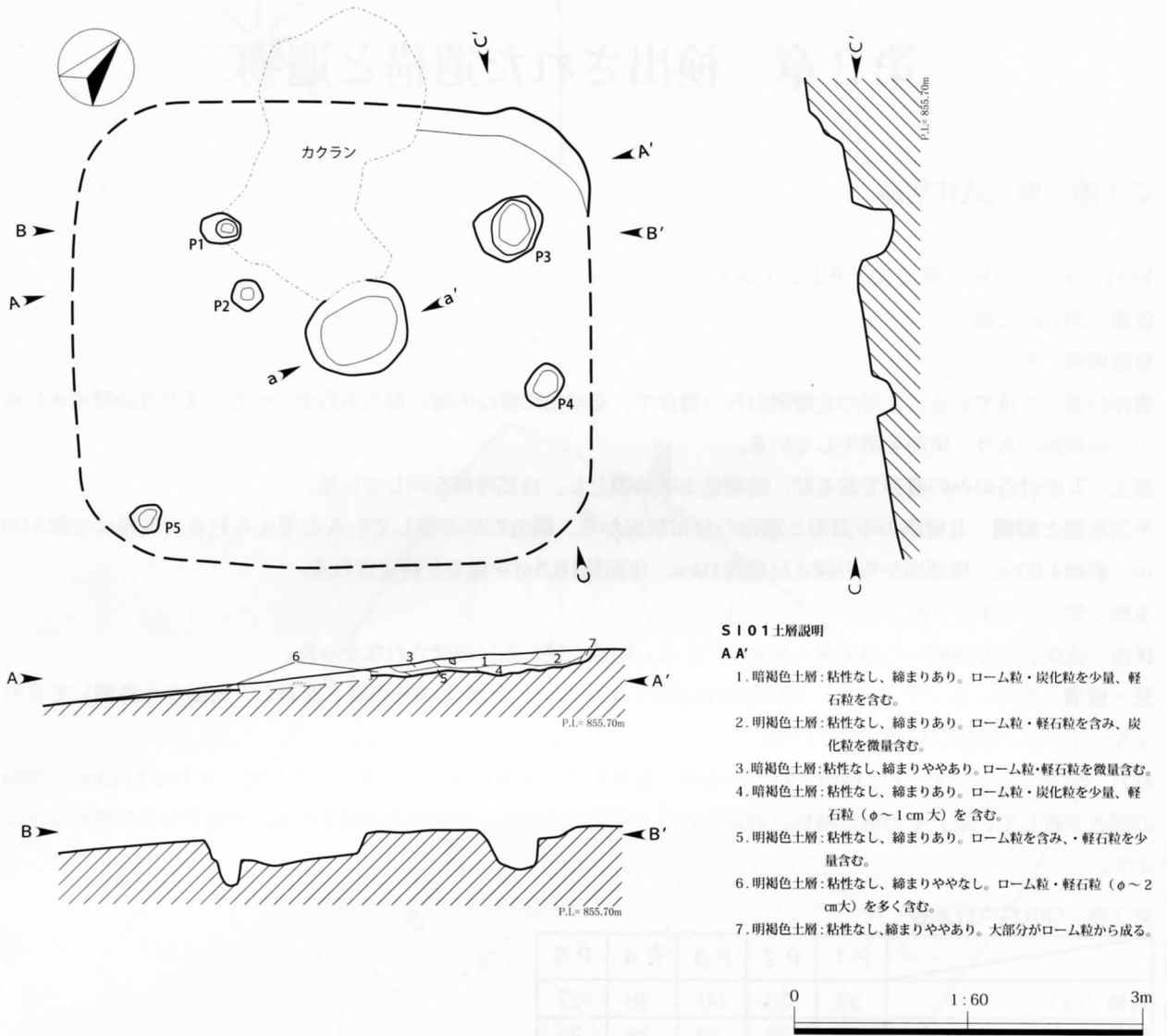
炉跡 床面を掘り込んで設置した地床炉である。住居跡のほぼ中央に位置し、遺存状態は良好である。平面形は楕円形を呈し、長軸89cm、短軸81cm、床面からの深さ10cmを測る。

その他の施設 なし。

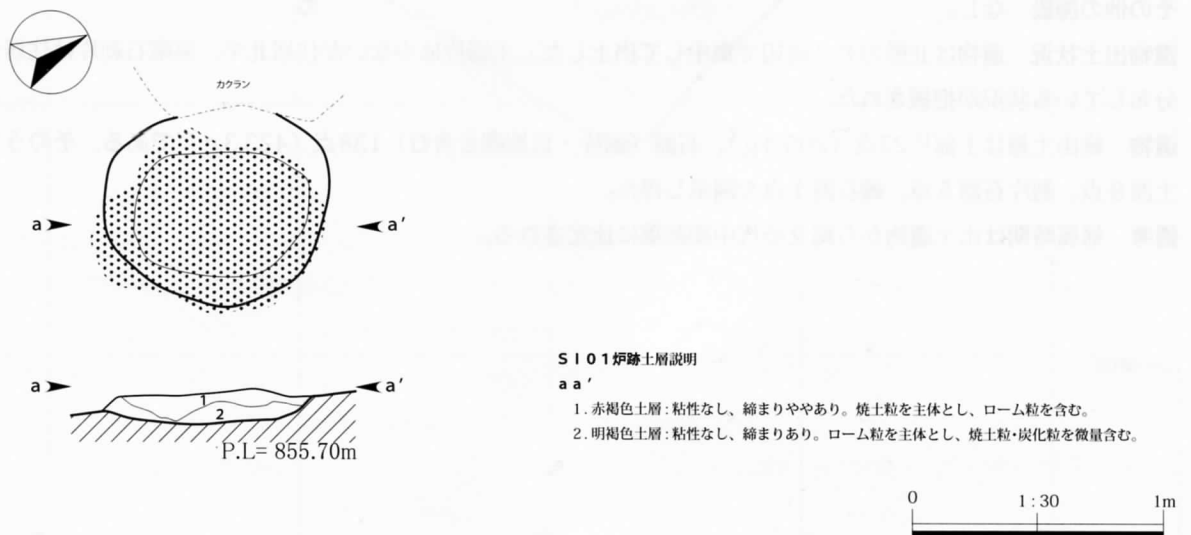
遺物出土状況 遺物は北壁のP3周辺で集中して出土した。土器片は少ないが住居北半、黒曜石剥片は住居全体に分布している状況が把握された。

遺物 総出土量は土器片22点(205.3g)、石器(剥片・自然礫を含む)138点(423.3g)である。そのうち縄文土器8点、剥片石器5点、礫石器1点を図示し得た。

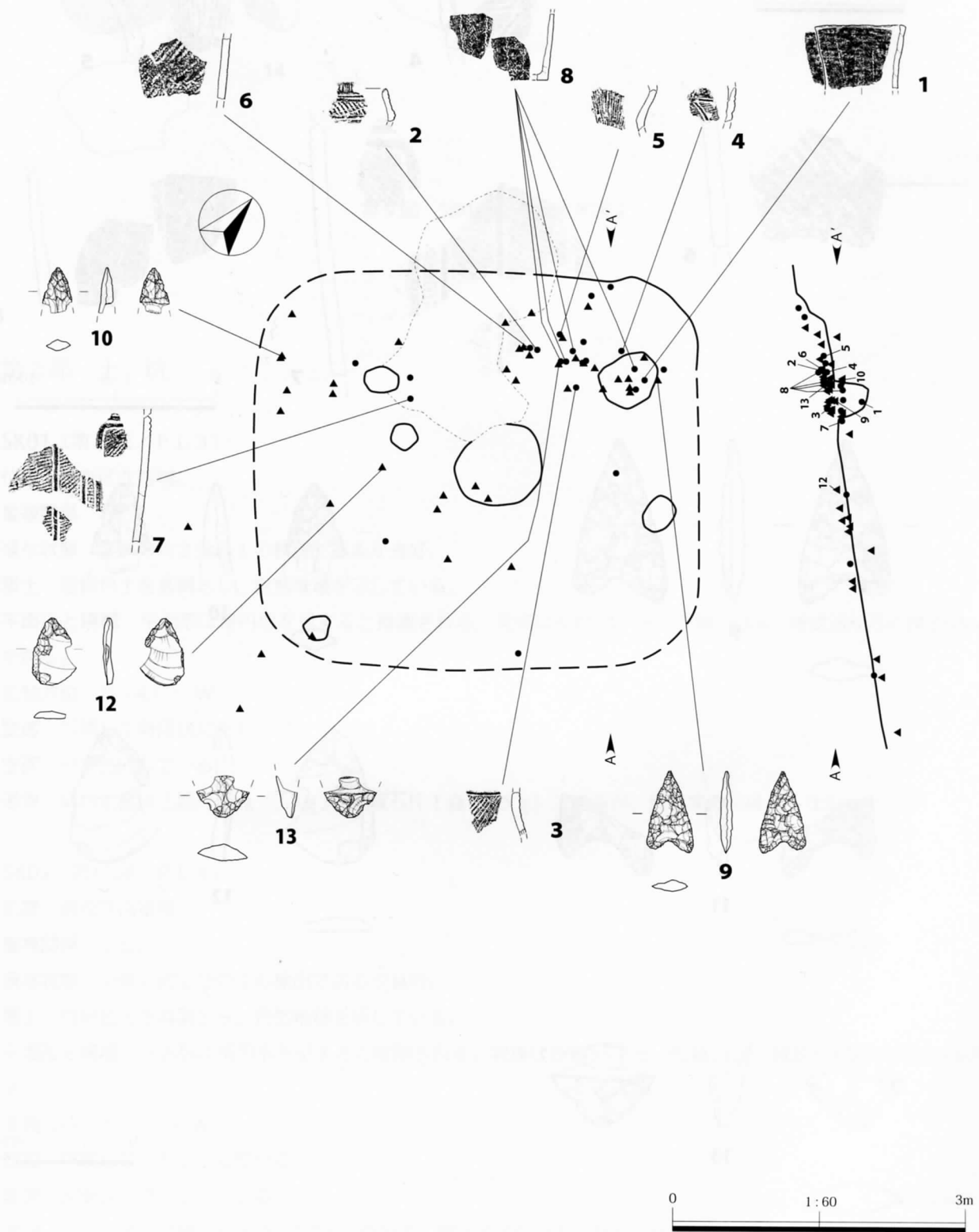
備考 帰属時期は出土遺物から縄文時代中期前葉に比定される。



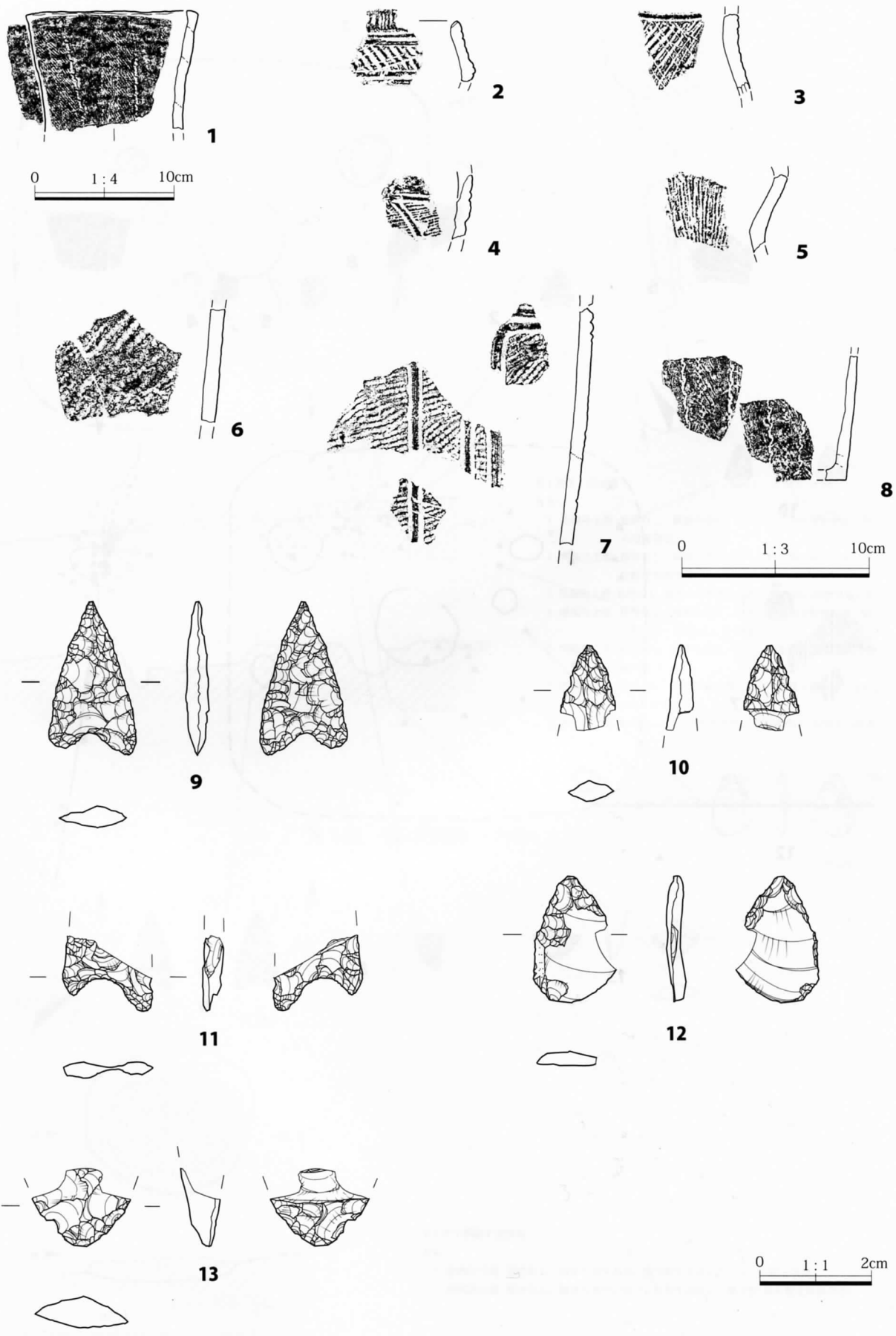
第5図 SI01実測図 (1/60)



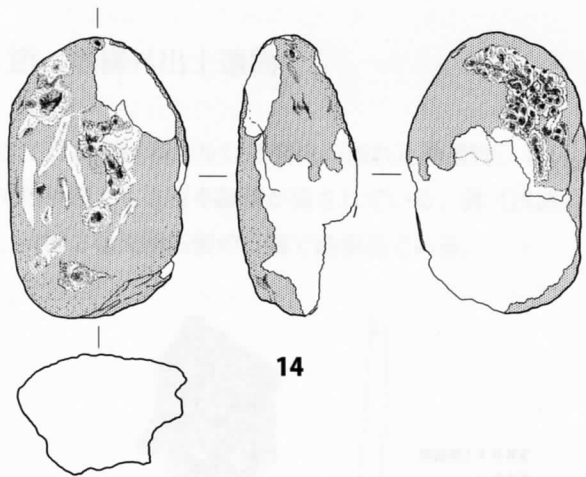
第6図 SI01炉跡実測図 (1/30)



第7図 SI01遺物出土状況図 (1/60)



第8图 SI01出土遺物実測図1



第9図 SI01出土遺物実測図2

## 第2節 土坑

### SK01 (第10図/PL3)

位置 調査区北西端。

重複関係 なし。

遺存状態 全体の約2分の1の検出であるが良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈すると推測される。規模は長軸84+cm、短軸143cm、確認面からの深さ68cmを測る。

主軸方位 N-47°-W

壁面 外傾して階段状に立ち上がっている。

底面 やや凸凹している。

遺物 総出土量は土器片1点(3.3g)、黒曜石片1点(0.5g)であるが、図示するには至らなかった。

### SK02 (第11図/PL4)

位置 調査区南東端。

重複関係 なし。

遺存状態 全体の約2分の1の検出であるが良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

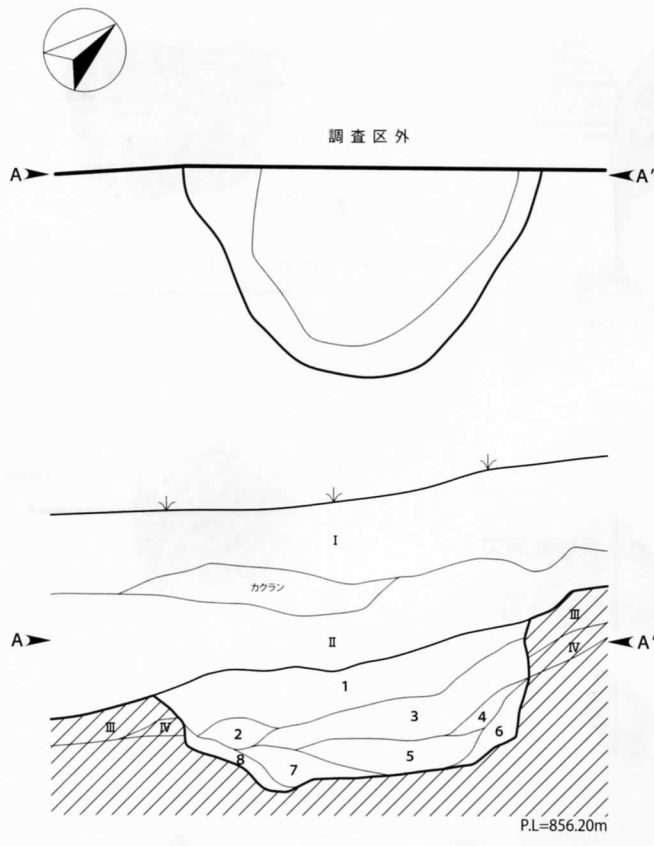
平面形と規模 平面形は楕円形を呈すると推測される。規模は長軸35+cm、短軸54cm、確認面からの深さ26cmを測る。

主軸方位 N-63°-W

壁面 内傾して立ち上がっている。

底面 南東側へ深くなっている。

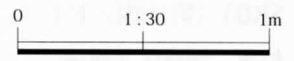
遺物 総出土量は黒曜石片2点(3.7g)のみで、図示するには至らなかった。



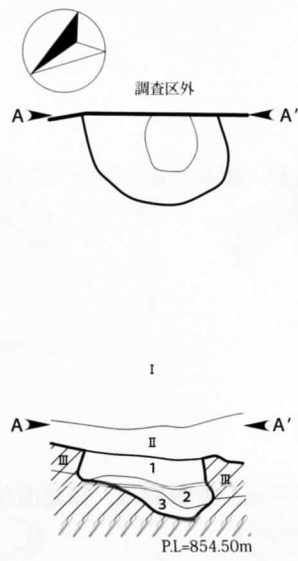
**SK01 土層説明**

AA'

1. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒 (φ~2cm 大) を含む。
2. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒を多量、軽石粒を少量含む。
3. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒を少量、軽石粒 (φ~1cm 大) を含む。
4. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒 (φ~1cm 大) を含む。
5. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒及びロームブロック (φ~2cm 大) を多量、軽石粒を少量、炭化粒を微量含む。
6. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒及びロームブロック (φ~2cm 大) を多量、軽石粒を微量含む。
7. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒を微量含む。
8. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。80%がローム粒・ロームブロックから成る。



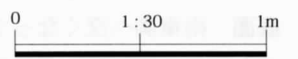
第10図 SK01実測図 (1/30)



**SK02 土層説明**

AA'

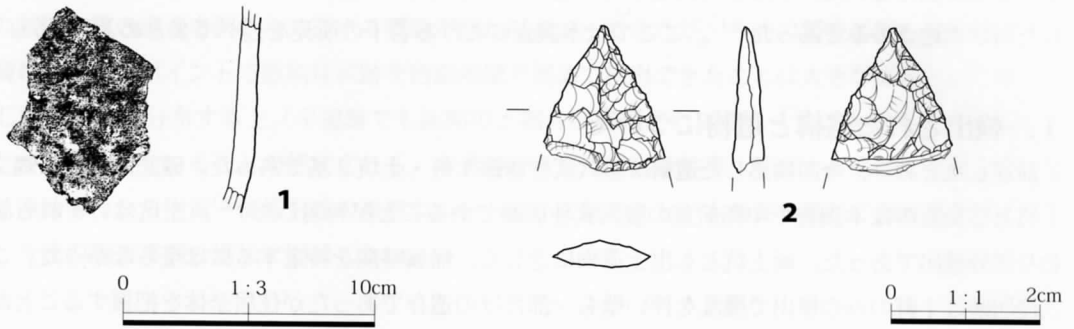
1. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒炭化粒を微量含む。
2. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。ローム粒を少量、軽石粒を微量含む。
3. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒を多量、軽石粒を少量、炭化粒を微量含む。



第11図 SK02実測図 (1/30)

### 第3節 遺構外出土遺物

ここでは調査区表土及び遺構内の流れ込み遺物、トレンチ出土遺物を一括して取り扱う。第12図1は深鉢の胴部片で内外面ともミガキ調整が施されている。鉢（浅鉢）の可能性もある。縄文土器ではあるが帰属時期は不明である。同図2は黒曜石製の石鏃で破損品である。



第12図 遺構外出土遺物実測図



## 第4章 調査の成果と課題

### はじめに

今回の調査は滝原線鉄塔化工事に先立つもので、僅か190㎡の調査であったが、縄文時代中期前葉住居跡1軒と土坑2基が検出された。本工事に関連して4地点の試掘確認調査を実施したが、周知の包蔵地内かつ遺構が検出されたのは本地点のみであった<sup>(1)</sup>。ここでは本調査における若干の所見を述べてまとめとしたい。

### 1. 検出された遺構と遺物について

前述したとおり、今回検出した遺構は竪穴式住居跡1軒・土坑2基であった。確認調査時に縄文時代中期初頭の土坑としたものは本調査で中期前葉の竪穴式住居跡であることが判明した<sup>(2)</sup>。土坑はいずれも調査区外に延びており部分検出であった。両土坑とも出土遺物に乏しく、帰属時期を特定するには至らなかった。これに対して竪穴式住居跡は1軒のみの検出で攪乱を伴い壁も一部だけの遺存であったが住居全体を把握することができた。当初土坑と考えていた北壁隅のP3周辺の平面形と遺物の分布状況から、隅丸方形を呈していると考えられ、規模は主軸3.90m、副軸4.50mと推定された。床面は硬化面を明確に捉えることができなかったが、住居推定範囲のほぼ中央に地床炉を有していることも住居跡と判断した大きな要因となった。出土遺物は多くないが、土器片よりも黒曜石剥片の出土が主体的であった。第8図1・8に特徴的に見られる結節縄文を縦位に間隔施文するのみのシンプルな文様構成は五領ヶ台Ⅱ式後半、同図7は半截竹管状工具の内皮を使用した縦位区画文から同工具による浅い横位沈線施文が見られることから「深沢式(系)」<sup>(3)</sup>に近似し、中期前葉に位置づけられよう<sup>(4)</sup>。

### 2. 周辺地域の中期初頭～前葉集落の様相

これまで長野原町域で中期初頭～前葉の住居跡の検出事例は決して多いとはいえないが、それは八ッ場ダム建設工事に伴い大規模調査を実施している吾妻川流域地帯東部地域に偏り、中でも林地区で集中していることが知られている。

#### (1) 立馬Ⅱ遺跡・楡木Ⅱ遺跡

立馬Ⅱ遺跡では該期住居跡が11軒、その他に土坑が約100基、楡木Ⅱ遺跡では住居跡が3軒、集石が15基の他、土坑・配石・埋甕がそれぞれ1基ずつ検出されている<sup>(5)</sup>。両遺跡とも狭小な丘陵の斜面地に構築され、かつ重複している住居跡が多いためか全形を把握する事例に乏しい。2遺跡あわせて14軒の住居跡が検出されているが、炉を伴うとされている住居は5軒のみである。この中には石囲炉だけで住居としているものや壁際の遺存状況の悪い焼土を伴う掘り込みを炉としているものを含んでいる。また遺構上面を厚い包含層が覆っていたことから、遺構内の一括遺物と廃棄遺物を分離して捉えることが難しく、遺物量が多く内容が充実しているにもかかわらず、本地域の該期土器群の様相を提示することへの障害となっている。遺構外遺物も含めて両遺跡の該期土器群は楡木Ⅱ遺跡で五領ヶ台Ⅰ式が僅かに破片で認められるが、五領ヶ台Ⅱ式～勝坂Ⅰ式古段階まで継続して確認されている。北信・東信地域の「深沢式(系)」や東北地方の大木7b式など異系統土器群の共存現象が認められている。

#### (2) 上原Ⅱ遺跡

近年調査した上原Ⅱ遺跡は最上位段丘に構築されており、住居ではなく竪穴状遺構としているものが2基と焼土遺構が5基のほか、土坑が18基、不明遺構1基が検出されている<sup>(6)</sup>。竪穴状遺構としているものは明確な床面や炉が確認されていないことに起因しているが、周辺に分布する焼土遺構を屋外炉と考えるならば住居跡とみなしてもいいかもしれない。この遺跡でも包含層出土遺物が多かったが、遺物集中箇所と捉えて、掘り込みのある遺構からの出土遺物と分離することに成功している。出土遺物は五領ヶ台Ⅱ式～阿玉台Ⅰa式を主体としているようである。詳細は本報告を待ちたい。



このように東部地域で該期の住居跡が検出されている3遺跡を概観すると、以下の4つ共通要素が抽出できた。

- ①河床と比高差のある丘陵ないしは最上位段丘の斜面地に立地している。
- ②総じて掘り込みが浅く、住居プランや柱穴の配置が不安定なものが多い。
- ③屋内炉を伴わない住居跡が多い傾向が窺える。
- ④出土遺物から中期初頭の五領ヶ台式ではI式はごく僅かで、主体はII式からである。

## おわりに

以上、本町域の該期集落の調査事例から共通する要素が浮かびあがってきたが、今回の調査事例も東部地域のそれと同じ傾向が窺われ、ピンポイントで該期住居跡を西部地域で初めて検出できたことは大きな成果といえるだろう。本遺跡と同じ熊川沿いに分布する上ノ平遺跡でも該期の土器片が表採されている<sup>(7)</sup>ことから、周辺に該期集落が小規模ながら点在していることが想定される。本遺跡が南部浅間高原地帯へ移行する位置に立地していることを考えると、原始古代から物資・情報伝達の重要なルート沿いにあることが本調査を通じて再認識されたことは収穫であった。今後の調査事例の増加に期待したい。

## 註

1. 長野原町教育委員会 2014『町内遺跡XIV』長野原町埋蔵文化財調査報告第28集
2. 註1と同じ。本報告をもって正式に訂正したい。
3. 高橋 保 1989「県内における縄文中期前半の関東・信州系土器」『新潟県考古学談話会会報』4  
寺内隆夫 1991「長野県上水内郡三水村・上赤塩遺跡出土の縄文中期土器について」『長野県考古学会誌』61・62号 長野県考古学会  
寺内隆夫 2000「第10章第1節 中期の土器」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書24—更埴市内その3—更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）』
4. 山口逸弘氏（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）の御教示による。
5. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006『立馬Ⅱ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009『楡木Ⅱ遺跡（2）』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第27集
6. 平成23年度に町営土地改良事業に伴い発掘調査を実施した。今年度報告書刊行予定である。
7. 町に寄贈された桜井光照氏の収集資料による。深さ15cmのテンバコで20箱近くの遺物量である。氏の収集資料は上ノ平遺跡を中心としており、縄文時代前期～後期の土器・石器、弥生時代中期前半の土器・石器、平安時代～近世の土師器・須恵器・陶磁器が認められる。弥生土器に関しては以前一部を資料紹介したが、今後このような個人のコレクションも資料報告する機会をつくっていきたい。  
富田孝彦 2000「外輪原Ⅰ遺跡出土の弥生中期土器」『群馬県考古学手帳』10

第3表 滝原IV遺跡出土遺物観察表

S101出土遺物観察表

図版 NO.	器種	法量(器高/口径/底径)(cm)	特 徴(形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調(外面/内面)	備考
8-1	縄文土器・深鉢	(8.5) / (12.4) / -	口唇部面取り、内面肥厚。外面は縦位絞筋LR縄文により間隔施文。内面は横位ナギ。内面は横位ナギ。	良好	角閃石・小石	にぶい赤褐色/にぶい、黄褐色	口縁部～体部上半30%残存。五割ヶ台皿式後半 P3
8-2	縄文土器・深鉢	(3.2) / - / -	内傾口縁。口唇部に縦筋有列。外面は横位竹管文区画内に斜格子状文を施す。内面は横位ナギナギ。	良好	角閃石・雲母	暗褐色/黒褐色	破片資料(口縁部) P3
8-3	縄文土器・深鉢	(4.2) / - / -	外面は横位竹管文・斜格子状文。内面は横位ナギナギ。	良好	雲母	暗褐色/黒褐色	破片資料(体部) P3
8-4	縄文土器・深鉢	(3.2) / - / -	外面は半載竹管文・斜位社線文。内面は横位ナギナギで刺離頭蓋。	良好	角閃石・白色粒	明赤褐色/にぶい赤褐色	破片資料(体部) P3
8-5	縄文土器・深鉢	(4.2) / - / -	外面は半載竹管文による縦位社線文。内面は横位ナギナギ。	良好	雲母	灰褐色/黒褐色	破片資料(体部) P3
8-6	縄文土器・深鉢	(6.1) / - / -	外面はLR縄文を横位施文。内面は横位ナギナギ。	良好	角閃石・長石・雲母	にぶい赤褐色/にぶい、褐色	破片資料(体部) P3
8-7	縄文土器・深鉢	(12.6) / - / -	外面はLR縄文を斜位施文した後に半載竹管状工具の内底による縦位区画文、同工具による浅い横位社線を施す。内面は横位ナギナギ。内外面に煤の付着あり。	良好	角閃石	褐色	破片資料(体部) 中期前葉 P1・P2・カケラン
8-8	縄文土器・深鉢	(8.2) / - / -	外面は絞筋LR縄文を縦位施文。内面は横位ナギ調整後に横位～斜位ナギナギ。	良好	角閃石・長石	にぶい、褐色/灰褐色	破片資料(底部～体部下半) 五割ヶ台皿式後半 P3
8-9	剥片石器類・石鏃	長2.7/幅1.6/厚0.4	重量1.2g。	-	黒曜石	-	完存。 P3
8-10	剥片石器類・石鏃	長(1.5)/幅(0.95)/厚0.5	重量0.4g。破損品。	-	黒曜石	-	60%残存。 P3
8-11	剥片石器類・石鏃	長(1.35)/幅1.6/厚0.4	重量0.4g。破損品。	-	黒曜石	-	40%残存。 中跡
8-12	剥片石器類・石鏃	長2.25/幅1.45/厚0.35	重量0.8g。未成品。	-	黒曜石	-	完存。 P3
8-13	剥片石器類・石鏃か	長(1.4)/幅(1.75)/厚(0.7)	重量0.7g。石鏃の可能性もあるが石筒の破損品と考えられる。	-	黒曜石	-	20%残存。 P3
9-14	礫石器類・磨石+砥石	長11.1/幅7.1/厚4.8	重量431g。	-	粗粒輝石安山岩	-	70%残存。 カケラン

遺構外出土遺物観察表

図版 NO.	器種	法量(器高/口径/底径)(cm)	特 徴(形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調(外面/内面)	備考
12-1	縄文土器・深鉢	(8.2) / - / -	浅鉢の可能性あり。外面は横位ナギ調整後に斜位ナギナギ。内面は横位ナギナギで指頭圧痕あり。	良好	小石	明赤褐色	破片資料(体部) 2トレ
12-2	剥片石器類・石鏃	長(1.9)/幅(1.6)/厚0.4	重量0.8g。破損品。	-	黒曜石	-	80%残存。

# 写真図版





1. 調査区近景（南東から）



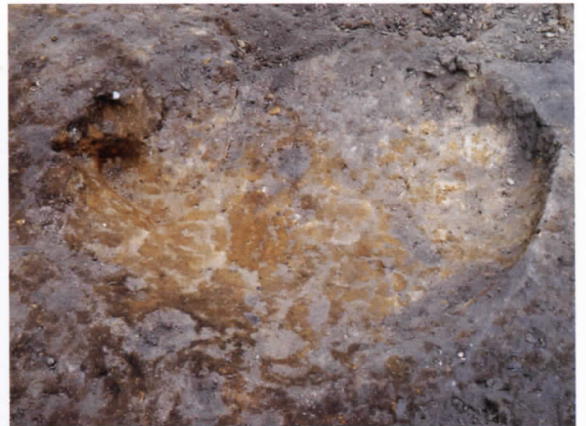
2. 調査区近景（南から）



1. SI01 (南東から)



2. 土層堆積状況 (南東から)



3. 炉跡 (南東から)



4. 炉跡半截状況 (南東から)



5. 炉跡検出状況 (南東から)



1. 遺物出土状況①（南から）



2. 遺物出土状況②（南東から）



3. 遺物出土状況③（南東から）



4. 遺物出土状況④（東から）



5. SK01（南東から）



1. SK02 (北西から)



2. 作業風景 (南東から)







航空写真（●が調査地点）

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	たきばらよんいせき							
書名	滝原IV遺跡							
副書名	熊川線No. 33 ～No. 49 鉄塔化工事に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	長野原町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第29集							
編著者名	富田孝彦							
編集機関	長野原町教育委員会							
所在地	〒377-1305 群馬県吾妻郡長野原町与喜屋174 Tel. 0279-82-4517							
発行年月日	西暦2014年12月5日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	(世界測地系)	(世界測地系)			
たきばらよんいせき 滝原IV遺跡	群馬県吾妻郡長野原町大字応桑	10424	153	363104	1383642	20130827 ～ 20130831	190	送電線鉄塔化工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
滝原IV遺跡	集落跡	縄文時代		住居跡 土坑	1軒 2基	縄文土器・石器		中期前葉住居跡の検出
要約	<p>本遺跡は吾妻川の支流である熊川の左岸段丘上に立地する。調査地点の標高は856m位である。縄文時代中期前葉の竪穴式住居跡1軒、土坑2基が検出された。住居は一部壁を残すのみであったが、ほぼ中央に地床炉をもち、平面形は隅丸方形を呈すると推定された。本地域での当該期住居の検出は吾妻川流域地帯東部地域に偏り、西部地域では初めてである。本遺跡は南部浅間高原地帯へ移行する位置に立地しており、原始古代から物資・情報伝達の重要なルート沿いにあることが再認識された。</p>							

## 滝原Ⅳ遺跡

——熊川線No.33～No.49鉄塔化工事に伴う発掘調査報告書——

平成26年12月2日 印刷

平成26年12月6日 発行

発行 群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

〒377-1305 群馬県吾妻郡長野原町大字与喜屋174

TEL 0279 (82) 4517 FAX 0279 (82) 4519

印刷 朝日印刷工業株式会社

# 正誤表

第11図 SK02実測図 (22頁)

